國上計畫資料　四

昭和十六年十一月一日

東亞共榮圏内主要民族略説（其一）

人口問題研究所

はしがき

東亜共榮圏人口再配分計畫研究の資料として本研究所に於て調査したる東亜共榮圏内主要民族の特性中、特に南方諸族に關するもの若干を選み、其の概要を速報的に取纒め部内の參考に資する爲不取敢謄寫印刷に附したるものなり。

昭和十六年十一月一日

人口問題研究所

目次

第一章　東亜共榮圏民族分類……一頁
第二章　南方共榮圏の人種地理的概觀……一三
第三章　南方共榮圏の民族……三三
一、安南族……三三
二、カンボジヤ族……三九
三、チベット族……四一
四、モイ族……四二
五、タイ族（シヤム人）……四三
六、ラオス族……五一
七、ビルマ族……五五
八、黎族……六一
九、ベタツク族……六三
一〇、アツチエ族……六四

一一、ミナンカボウ族……六五
一二、ブギ族・マカツサル族・トラジヤ族・ミナハサ族・トアラ族……六七
一三、マレー族……七〇
一四、ジヤクン族……七一
一五、パプア族……七二
一六、ネグリトー族……七五
一七、ダイヤク族……七六
一八、其他の小種族……七六
一九、ジヤベア族……八二
二〇、バリー族……八九
二一、フイリツピン族……九〇
二二、モロ族……九五
二三、イゴロツト族……九七
第四章 印度の民族……九九

第五章　北方共榮圏の民族……一〇九

一、シベリヤの民族……一〇九
二、ツングース族・滿洲ツングース族……一一七
三、トルコ族……一二一
四、蒙古族……一四四
五、西藏族……一五三
六、黄族……一六一
七、苗族……一七二
八、猺族……一七六
九、羅羅族……一七七

第一章　東亜共榮圏の民族分類

大東亜共榮圏の建設の基礎は実に人種的血縁及び生活空間の近接性、經済的相互補足性にある。

廣域經済圏としての東亜共榮圏の政治的、經済構成はいふまでもなく事変完遂のための高度國防國家の建設に目的が置かれてゐるものであるが、それが成功するためには東亜廣域經済圏の構想の外に、それらの基底をなすところの内部的に分裂してゐる諸民族を有機的に結合して英米の阻害勢力と闘はなければならない。

今東亜共榮圏内及びその接壤地域に居住してゐる主なる民族名を列挙すれば次の如くである。

一、蒙古利亜種　Mongolian or Mongoloid

(A)北部蒙古利亜種

(一)蒙古族　Mongols Proper

(1) 喀爾喀族　Khalka

察哈爾族　Chahkhar

(2) 額魯特族　Eleut — ロシヤ人は Kalmuk と呼ぶ

(3) 布里雅特族　Buryat

(三) 通古斯族　Tungus

(1) 滿洲族　Manchu

(2) 窪行人　Gilds — 師使大部

(3) 鄂倫春人　Orochons — 師使農部

(4) 索倫春人　Solons

(5) 錫伯人　Sib

(6) 打虎爾　Dahur

(三) 朝鮮人　Krean

(四) 大和民族　Japanese

(五) トルコ朋ち突厥族　Turk

(1) トルコマン　Turkoman
(2) タランチ　Taranchi
(3) ドウラニ　Duranni
(4) ウゾベック　Uzbeg
(5) キリギス　Kirghiz
(6) ヤクート　Yakuts
(7) トンガン　Tongan
(8) オスマンリ、トルコ　Osmanli Turks

(B) 南部蒙古族利亜種

(一) 漢族　Chinese
(二) 苗族　Miao　Yao
(三) 羅羅族　Lolo
(四) 西藏族　Tibetans
(五) 波巴族　Bodo-Po

(2) 德魯巴族	Dru-pa
(3) 唐古耕族	Tangus
(4) 西番族	Sifong
(5) 羅巴族	Lho-pa
(6) 郎格族	Rongs
(7) 達王族	Ta Wangs
(8) 濕米爾族	Mishimi
(9) 彌利族	Mizi
(10) 阿薄耳族	Abor
(11) 達夫拉族	Daflos
(12) 巴爾提族	Balti
(13) 達奇族	Ladkhi
(五) 安南族	Anamese
(1) 固有安南族	Anamese Proper

(2) 占族 Tjam, Chtam

(3) 柬埔寨族 Cambodians

(六) 泰撣族 Tai - Shans

(1) パイ族 Pa-y

(2) シャム族 Siamese

(3) ラオス族 Laos

(七) ビルマ族 Burmese

(1) 固有ビルマ族 Burmese proper

(2) ナガ族、 Nagas クキ族 Kuki

マニプリ族 Manipuri

(3) チン族 Chins

(4) カチン族 Kachins

(5) カレン族 Karens

(C) 海洋蒙古利亜種 — 馬來種

(1) 黎族 Limu or Tai

(二)高砂族 Formosan

(1)タイヤール族 Taiyal

(2)ブヌン族 Bunun

(3)ツオ族 Tsuon

(4)アミ族 Ami

(5)パイワン族 Pai wan

(6)サイセット族 Saisett

(7)ヤミ族 Yami

(三)馬來半島人

(1)ジャクン族 Jakun

(2)オラン マラユー族 Orang malayu

(四)フイリツピン人 Philippines

(1)タガログ Tagalog

ビサヤ等 Bisaya

(2) モロ　Moro

(3) イゴロト　Igorot

ボントク　Bontok

イフガオ　Ifugao

マンヂヤン　mangyan

(五) ボルネオ人　Bornean

(1) プナン　Punan　ウキト　Ukit

(2) クレマンタン　Klemantan

陸ダイヤク　Land Dayak

(3) バホー・ケンヤ・カヤン　Bahau Kenyah-Kayan

(4) 海ダイヤク　即ち　イバン

(六) セレベス人　Celebes

(1) マンカサラス　mangkassaras

(2) ブギ　Bugis

(ヘ) ミヤガアイ	Javaness
(1) スンダ族	Sundanese
(2) 固有ミヤガアイ	Javanese Proper
(3) マンドウリーズ	Mandurese
(ハ) スマトラ人	Sumatran
(1) オラングマライー	Orang malayn
(2) バッタス	Battas
(3) アチニーズ	Achinese
(ロ) アジヤ・コーカサス種	Asiatic Caucasians
(1) サリコリ	Sarikoli
(ハ) ペルシヤ人	Persians
(1) タジーク	Tajik
(a) 固有タジーク	Tajik proper
(b) ガルチヤ	Yalcha

(2) 固有ペルシヤ人	Persians Proper
(a) ファルシ	Farsi
(b) ロリ	Lori
(三) アフガン	Afghan
(四) バルチ	Baluchi
(1) ヂヨルジヤ人	Georgian
(2) アルメニヤ人	Armenian
(五) 印度人	Hindus
(六) ドラヴィダ人	Dravidans
(七) ジプシー	Gypsy
(八) インドネシヤ	Indonesians
(九) アイヌ	Ainu
(E) 極北民族	Hyperboreairs
(1) ユカギール	Yakoghirs

(2) チュクチ — Chukchi

(3) コリヤーク — Koryaks

(4) カムチャダール — Kamchadales

(5) ギリヤーク — Gilyaks — 即ち魚皮韃子

(E) 海洋ニグロ種

(一) パプアミア人 — Papuasians

(1) パプア人 — Papuan

(2) メラネシア人 — Melanesian

(二) ニグリト族 — Negrito

(1) アンダマン人 — Andamanese

(2) セマング人 — Semangs

(3) アエタ — Aetas

(4) タピロ — Tapiro

(三) タスマニア人 — Tasmanians

(G) 混種又は系統不明の小種族

(一) 前ドラヴィダ人 Pre-Dravidians

(1) カディール Kadir

(2) パニヤン Payan

(3) イルラ Irula

(4) クランバ Kuramba

(二) ヴェダ Veddas

(三) サカイ Sakai

(四) オーストラリヤ原住民 Australian Natives

(五) ポリネシヤ人 Polynesian

(1) マオリ族 Maori

(2) フイジ族 Fijian

(3) トンガ族 Tongans

(4) サマア族 Samoans

(5) ハヒチ族 Tahitians

(6) マルケサス族 Marquesans

(7) ハワイ族 Hawaiians

(8) イースター島民 Easter Islanders

(六) ミクロネシア人 Micronesians

第二章　南方共栄圏の人種地理的概観

南方共栄圏の諸民族を取扱ふにはアジヤ大陸と南方諸島との陸橋にあるマレー半島を其の人種的観点から取扱ひ、東南アジア一帯の地理を概観して置くことが便利と思はれるので、その限りに就て其等の地理的概観を與へることにする。マレー半島は西藏ノ雲南高原の根元から発し、一部の地域を除いて、大部分は熱帯地域内にあるが、モンスーンの影響の為に冬期には比較的冷たい気候を呈してゐる。ビルマと印度とを境付けるものは海と高原地帯である。先づビルマを見るならばビルマは地理的には五つの区劃、即ち中央ビルマ、ニナザリム、アラカン、チン高原及びシヤン州に分けられる。中央ビルマは暑い高温のイラワジの大三角州を含み、其ノ大部分は米作に貢献する所大なる地域である。土地は水に恵まれ、住民はその点まことに有用な上に生活して居る訳である。此の國の北部地帯は依然として高温、高温地帯となつて居り、河の沿岸一帯の土は冲積層である。此の地域の南部及び東部にテナザリム及びカレンニがある。其の中に海

峡國があるが先づビルマを見るならばその大部分は稠密に繁茂せる熱帯森林で被はれた凹凸ある山嶽から成つてゐる。アラカンには稠密に森林の被茂つて地方を背景とせる熱帯マングローヴ・クリークのある沿岸地帯が包含されてゐる。　チン高原は海拔約五、〇〇〇呎から九、〇〇〇呎の可成り高い地域から構成されてゐる。其処には稠密な森林が繁茂して居り、一般に好適な気候を呈してゐる。最後にシヤン州は五〇、〇〇〇平方哩以上の巨大な地域を構成してゐる。一般に高さ三、〇〇〇呎から四、〇〇〇呎の間の高原から成つてゐる。此の高原の大部は起伏せる高原国から成立つてゐるのであつて、通常は樹木充分繁茂し、サルウイン河によつて二地域に分たれてゐる。其れは雲南と似ビルマ地方との間の連鎖地帯を構成してゐるのである。　シヤン州から支那文化がシヤムに這入りこんだのであるが、今日のシヤムは実際には、バンコックに展開せる大狭谷か其の大部分であつて、其他メナム及其の屬国によつて構成されてゐる。幅、約一五〇哩、長さ六五〇哩の緩やかなる傾斜地帯である。シヤムは南方にはマレー半島に打拡つて居り、其れ故唯に支那のみならずマレージアと一つの連鎖地帯を形成してゐる。シヤム國の大部分は野生の荒い密林から成つて居り、其所は通る道はメナヒ狭谷唯一本であつて、それは人種移動の通路となつてゐたものと思はれる。　シヤム及びシヤン州の東にはフランスから影響を受けた佛領印度支那がある。其は又北方には雲南の高断崖と境を成して居り、支那の廣西省の南

境となつてゐる。東方及び南方は海洋である。一般に此の地域はメコン河及赤河（Red River）の二つのデルタ、及狹沿岸地帶から成つてゐる。

マレー半島の北部は今迄殆んど知られてゐないが南部の地域は可成り吟味を加へられた所である。マレー半島は梯列狀の山嶽地帶から成立してゐるのであるが其の方向は云はゞ北々西及南々西を指し示してゐると云ふ事が出来よう。其所には又一般的連系から外れた孤立的高原地帶が存在する。此のマレー半島は比較的狹いので河長は短い。主要なる河はペラク河、ペハン河、ケランタン河等であり、此の地域の住民に最も大なる重要性を持つてゐる。

ジヤングル其れ自身は其の地域に住む人間の生活に於ける最も支配的な要因を成して居り、眞の密林居住者たる原始民族、マレー人にとつては特に其の事が云へる。彼等は單調な気候の中に生活してゐる。森林は暗く、而も極めて濕度が高い。気溫はペルシヤ湾の近隣國に於る程過激ではないが、日々の変動少きため、年平均溫度は高く現れてゐる。森林は旅行者の

眼には美しい獄窓の如く見えるが現実は全く押へ付けられる様な気溢を呈してゐる。

人間の手によって此の處女地は開拓され、米作地や栽植地が存してゐるが、其の密林の大部分のものは依然として半島に残されてゐる。

微細な点では可成りの論議が存するけれども東印度を東部と西部とに分けて考察する事に就いては地理學者、生物學者双方の意見の一致を見てゐる所である。其の西方部はアジアと境を画して居り、云はゞアジアの潜入部と記述されるであらう。其の東部はオーストラリア大陸の一部を形成してゐるものと云ふ事が出来る。

動物地學的及植物學的分離は既に想らく往古の頃のものと思はれるが、其の分離は其の地域に住む住民の肉体型を分類すべき決定的方法を現すものとして人種學者は考へてゐる。西部に於て住民の親縁関係はアジア的である。東半部に於ては全く異った住民型が支配的であり、其の最も顕著なる特徴は皮膚の色の暗色にある。この事からメラネシア、即ち黒色種族の

島なる名称が生れるに至つた。

成程、人類學的、動物地學的、植物學的分布は全き相関々係を有して居らない。セレベスは親縁的にはアジア的である。だが全体として人種的及び他の生物的な型の一致は不一致よりもより大なるものがある。宗教的、社会的慣習も全体として見れば同様な分離の跡を示してゐるのは興味深いことである。例へば古代ヒンヅー佛教の跡を極度に残してゐる島は地理的にはアジアに属してゐるものである。セレベス及び其の他の東方諸島は現在は斯る根跡を何ら止めては居らない。

ヒリツピンは二つの群島系列としての特有な地位を有してゐる。即ちアシア的な親縁関係を有せるボルネオと境を接し、三分の一は東部セレベスと、四分の一は我が台湾と連結してゐる。地理學者や生物學者は其の正確なる親縁関係の問題に関して何等かの疑問を藏してゐるけれども、人種學者は其の点一層悪きれた地位にある。

人種學的見地から見て此の群島を二つの集団、即ち蘭印とヒリツピン群

島とに分けて取扱ふことは便宜の方法と思はれる。だが然し此の分割は純粋に便宜的なものである。

偖、蘭印の最良なる地理的分割に関しては之迄可成りの議論が存在した。我々は以下次の如き分離規準に沿つて敍述する事にする。

〔第一〕大スンダ群島（The greater Sunda Islands）此の中にはスマトラ島ジャヴァ島、ボルネオ島、セレベス島、及其等の外周に存する小さな島々が含まれる。

〔第二〕小スンダ群島（The Lesser Sunda Islands）此の中にはバリ島からチモール島に至る長い線内のものが含められる。

〔第三〕マラッカ島

即ちえである。ニューギニアは多くの点で此の集団に属するのであるが、此の島の人種學的問題はアジアと云ふよりはオセアニアのものに属してゐる。

両方の島にわ各時期にアジア大陸の一部を構成し、また其れと互に連絡

されてゐたと信ずべき理由は多数存在するやうに考へられる、第二世紀の頃スマトラとマラッカとは続いてゐたと之迄述べられて来てゐる。東部諸島はオーストラリヤ大陸の一部を構成してゐたものゝ如くである。斯くて西方に於て現代の住民が其の居を定めた頃に此の島々は大陸の影響の下に曝された事になる。然し乍ら東部では其の條件は極めて相違して居り、其の地域に住居せる種族の形態及分布には孤立狀態が一つの重要なる役割を演じたやうに思はれる。

スマトラは約六、〇〇〇、〇〇〇人と云ふ比較的小人口を容し乍ら、一六〇、〇〇〇平方哩以上の地域を構成してゐる。古生代の岩石が発見されるが其の島の大部分は第三紀層から成つてゐる。其の主要な天然の特徴は南西沿岸に沿つて走るバリサン高山脈地帯である。此の山脈は無数の火山を容して居り、其の中の或るものは尚も活火山である。此の地帯の北東には廣大な沖積層平野が打擴つてゐる。西部沿岸及び此の島の北東部には数多くの川があるけども交通に有利な役目を果して居らない。然し乍ら平野は一層の

重要性を有してゐる。最大の河はジヤムビ河であるが、モエヂ河は長く交通の最も重要な手段となり来つたものである。スマトラの気候は極めて暑く其の湿度は相対的大である。

ジヤヴア島はスマトラの約四分の一の大きさであるが極めて大人口であつて約四〇、〇〇〇、〇〇〇人を数へる。此の島の最も際立つた特徴は大山脈があることでえはビルマからマラツカに走る大地帯の連続と見る事が出来る。此の島の大低の山は火山であり、尚も活火山たるものがある。此の島の大部分は溶岩から出来て居り全島の三分の二は山であるが而も島は驚くべき程肥沃な土壌となつてゐる。最も原始的な方法を以つてしても住民全部の食料を供すべきものを生産する事が出来る。植物は繁茂して居り、其の中を通り抜ける事は出来ない。気候は極度に暑く湿度も高いが、此所ジヤヴアではスマトラに於ると同様に高地には好適なる開墾地域があり、庭は百花燎乱たる薔薇に満ち満ちてゐる。

ボルネオはスマトラと同様な気象條件を有してゐる。寧ろ其の他の蘭印

よりは異つた而も一層規則的な地理的連続層を持つて居り、一般的性格としてより一層大陸的である。沿岸地帯は大部分は低地で沼沢地となつて居るけれども此の巨大なる島の大部分は處女林で被はれてゐると云ふ現況である。中央山嶽部から発し各方面の海に注ぐ河が数多く存在する。人口は百五十萬に近いものと評價されてゐる。

セレベス島は比較的未だ探険されざる地域である。其の奇好なる狀態をしてゐるので注目すべきものとなつてゐる。四つの長い山脈地の半島が中央から走つてゐる。隣のハルナイラ島は略々同様な形狀を持てるものである。河は総て短く、航行に耐え難きものである。其の地理は依然として未知の領域となつてゐるけれどもセレベス島は往昔の大陸から孤立したものゝ如くである。其の北部は赤道の気候であるけれども、南部は決定的に濕季と乾季とを有して居り此の点で他のものと相違してゐる。

マラッカ島は小さな島から成る三つの集団を包含してゐる。又其れ等は典型的な赤道気候を有してゐる。動物及び植物を見るとオーストラリアの

生物學的地域に密切なる関係があることを示してゐる。小スンダ群島も亦此の生物學的地域に属して居り全体として島は乾燥せる地域となつて居り、其の西部近隣諸島と著しい対照を為してゐる。

ヒリツピン群島は極めて多数の島嶼から成る一大群島であり其の大部分のものは狭い海峡によつて夫々分離してゐる。此の群島の三分の二はルゾン（Luzon）及ミンダナヲ（Mindanao）両諸島により構成されてゐる。之等二諸島は大湖沼地域を包含してゐるけれども島の大部分極めて山嶽に取巻かれてゐる。山と海の間に肥沃な沖積層があるが住民の大部分は此の狭い沿岸地帯に沿つて生活してゐる。

此の地域の人種は其の地理的分割に従つて自ら三つの部分となる。印度支那、マレー半島及び諸群島とがえである

アジア大陸の南東部の住民はあれこれと多様に之まで分類されて来てゐる。ジョイス（Joyce）は三つの分類を示してゐる。第一のものは初期ホグリート住民の散在せる残存種族であり、第二のものはモイ族を含むインド

ネシア集団、第三の種族型は南方モンゴリア族（タイ族、シヤム族、シヤン族、北安南のトウ族、カムボヂヤのラオ族、安南人、ビルマ人）えである。ジョイスはカマール族が恐らくはマレー人と他とインドネシア人との混淆と考へてゐた様である。

デニカー（Deniker）は一層精緻な分類形態を提示してゐる。彼は二つの主要集団を認めてゐる。即ち印度支那の原住民集団と混淆民集団とである。最初のものは数多くの種族を包含してゐる。モア族を彼は奴隷種族として記述してゐる。クイ族は二つの人種的集団、即ちシヤムの南東部及びカンボヂヤの北西部に於る集団と、シヤン州に於る集団との二つのものを含むとデニカーは信じてゐる。前者はモア族と同様な原住種族であり、後者はラマ族の分岐種族である。モン族及びタライン族は昔、低ビルマ地方の全地域を占めてゐたものゝ残存種族である。シヤム族はビンタン地方及び他の南アッサム、交趾支那、カンボヂヤに住居してゐる。カレン族はメピンの上谷、アラカンの山嶽地域等に住んで居り、モア族より遠れてビルマに這

入つて来たものと思はれる。最後に彼はインドネシア人をナガ族とセルング族の二つに分類してゐる。

混淆種族の中、デニカーは四の集団を分類してゐる。

(1) カンボヂヤ族又はケマール族
(2) 安南人
(3) ビルマ人
(4) タイ人

この中カンボヂヤ及ケマール両族を彼はマレー族又はクイ族とヒンヅーの混淆との混血と見做して居り、更にタイは明かにインドネシア人と考へてゐる。彼は一定の肉体的特徴を云々してゐるけれども彼の分類が一部は文化に一部は種族の言語に基礎を置いてゐることは明白である。

ビルマの住民に関して最も慎重にして充分な考察を與へたのはハーバート、ホワイト卿（Sir Herbert White）であつた。彼の述べる所によればビルマの住民の約三分の二はビルマ人であつて、それはシヤン州、カチン、

、メン高原及びカレンニに於るものを除いては総ゆる住民に優れて支配的な要素であると彼は述べてゐる。シヤン族はまた住民中一つの重要な要素を形成してゐる。而して甫余がものゝ中、最も数多きものはチン族、カチン族、タレイン族及パロング族である。而して常に少くも数百年の間、ビルマに数多くの支那人が居住してゐたやうに思はれる。現在之等の支那人は其の数を増しつゝあり、而も自由にビルマ人と混血してゐる。

之等の種族史はハッドンによつて簡功に叙述されてゐる。彼によれば比較的最近に至るまでビルマの住民はネジオト族であつて、現在の西蔵リトルマ族は Yangtze Kiang の上流から這入つて来たものとされてゐる「ビルマ人が紀元前六〇〇年以前にイラワジ谷に達したと云ふ證據は別に何ら存しない」とは彼の言である。

此の地方の比較的接近し難い性格のために此の地域には相互に可成り相違せる小集団があり、種々の河谷は各々の集団を特徴付ける地域となつてゐる。そこでビルマを甫余の地域と区別し全地域を二分して考へるを至當とするやう

に思はれる。

少くも、或る地域に於ては其の原住民がネグリートであつた事を暗示する証跡が存在する。このネグリートは現にマレー半島に尚も生存してゐるものである。カンボヂヤについてベルノーは語り、此の種族は多年の間一つの集団として存在することを止めたけれども、住民の下層を構成してゐると結論してゐる。

此の地域に現れてゐる第二の集団成員は所謂ネジオト族に近い種族である。彼等は殆んどこの地域の原住民であつて、今日比較的非混淆状態に於て彼等を発見し得る場所は人里離れた山嶽地帯である。更に南方印度の所謂ドラビダ人種に親近せる一要素が存在してゐる。之等のものは明かにネジオト族に親近してゐるけれども彼等が特殊化された系統を現はして居り、此の地方に到達したのは比較的最近のものゝ如くである。最後に一つの大且重要なる要素がある。即ち之は其の言語や文化を住民に課したもので、結局之は支那から這入つて来た種族である。パレアン族が即ち之である。

偖以上の如く全体としては広く考へて此の地方には少くとも四つの種族系統の痕跡が存在する。

ネグリートの起源地が何處であつたかは我々は知らない。其の現在の分布は確かに南西アジアの一点を中心に散布してゐるのであるが、何時何處から彼等が此の地域に這入つて来たものであるかについて我々は言ふ事が出来ない。ネジオト族の要素は今日依然として雲南に生存してゐる親縁族の中にあり、西藏、雲南高原から此の國に這入つて来たものとも言へさうである。ネグリート族は現在迄の報告によればビルマには何等の痕跡を止めて居らない。それ故我々が知る限りでは、ネジオト族が此の地域の初期の住民であつたやうに思はれる。

印度から此の地域に向つて人種の東方移動があつたものと考へられるが、恐らくそれはドラビダ系の人種であつてネジオト族ではなかつたやうに思はれる。尤もネジオトと緊密に接近したもので、ビルマ住民の短身長、長頭の種族部分によるものと思はれる。ジョイスが南方モンゴリアと記述し

てゐる要素は北方から此の地方に入つて来た。

テイルデスリはマウルメインの近隣に住むビルマ住民を三つの集団に分けてゐる。第一の集団は彼女が純粋ビルマ人と記述する所のものである。之はマレー人に近く支那とは殆んど親縁関係なきものである。第二の集団はカレン人と名付てゐるものであつて、之は第一のものとは反対に支那人に近く、マレー人に遠いものである。元来支那人はマレー系統よりはカウカサス系統に属するから、之はビルマ系統と云ふよりカウカサス系統と云つた方がよいと彼女は説いてゐる。恐らく彼女の言はビルマ系統よりはカウカサス系統に属すると云ふ意味であらうが、其の点は確かならざるものがある

此の問題について一層明確に立論したのはモラント（G.M. Morant）であつて、テイデスリの資料を用ひて一層広範なる内容を附與した。ビルマ人、(A)は肉体的にはマレー型に連結してゐるが、結局は南方支那人に結びついてゐるものである。と彼は提案する。之は確かにパレアン人の発展せ

る型と考ふべきものであつて、其の連鎖はモラントによつて提案されたものである。

南方支那人は暑い地方に生活してゐるけれども、現実には熱帯の居住者ではないのであるから、純粋ビルマ人を目して支那人型が熱帯的風土條件によつて特殊化されたものとも云へさうである

第二の型についてはモラントに於ては少しく異つた取扱を受けてゐる。彼は其れを彼の東洋人種と云ふ一般的図式(シニーマ)の中には含めて居らない。然し乍ら、彼がチベット人、(B)と名付けたものは其の他の東洋型よりはビルマ人、(B)、(C)に一層親縁関係を有せるものである。とも角、ビルマには北方即ち雲南高原に其の親縁関係を有せる第二の人種がゐる。此の型は南方支那及び西藏高原の住民に近縁関係を有するものである。如何なる場合にまれ、我々が見てゐる種族は黄色人に最も近いものではあるが、恐らくは其の他の血も混つてゐるものと思はれる。然し乍ら、ビルマ人の短頭なるものは黄色人と云ふ提案によつてのみは解決され得ない顕著なる特徴を有してゐ

る。何故なら如上の支那人の大多数のものは中頭型だからである。

然し乍ら、西藏高原及雲南はアルプス人種の疑ひもなき痕跡が存して居り、タリム盆地西方に幾分純粋な型で存在してゐる。だからテイルデスリがカウカサス系統の証據を見出したので、之をアルプス人とした事もさう不可能の事でもなさゝうである。ビルマ人の頭蓋骨は若干の点で他のものとは顕著なるものがある。即ち其れが東洋人の残存頭蓋より短いばかりではなく、それより廣い。頭形指数は複雑な問題を氷解させるに役立つ。鼻形指数は通常人種特徴を見る好適な指標ではない。鼻は扁平である。

ビルマの外囲地域は人類學者の間に注目を引き付けて来た地域ではない。ヴエルノオ及びパネテイアは其の貴重なカンボヂヤ研究に於て、其所に少くも四つの系統が存在すると云ふ結論に達した。最初の而も古いものは、ネグリート族とされる。今日此の要素は全一体として存在は認められないが、住民中の或る成員として認められ得るに過ぎない。

第二のものはネジオト族である。此の人種の残存物は柬埔寨註※(Tonle Sap)

及其の屬辺の漁族の墓の中に見出される。之等の原始種族は尚も山嶽地帶に見出される。だが之等のものは少くとも後に侵入して来たものと混淆したものと思はれる。

第三の要素は印度及び諸方の島々から来りたるものである。其の頭形は中頭型又は半短頭型である。

第四の要素は蒙古及びモンゴロイドと記されるものである。

偖之は昔、ツアボロフスキー（S. Zaborowski）によつて分析されたものよりは一層精緻な分類である。

偖以上ビルマの人種を概觀するに當つて我々はテイルデスリーの假定即ちマレー系統と支那系統の存在を出発点として分析のメスを加へたのであるが、カンボヂヤに於ては正しく此の二つの型の存在を見る事が出来るのである。

註※湖水にして面積最小八〇方哩、雨季には八〇〇方哩に及ぶと言はれる。

第三章　南方共榮圏の民族

一、安南族

安南族は北方から南下せしもので、蒙古族の一派と考へられる。安南族の移動は前史時代に開始され、屢〻支那の支配下に帰したこともあるが、十世紀末には独立せしこともある。次第に南にその分布地域を拡大し、チャム族、クメル族（カムボジヤ人）を駆逐して南方のデルタに迄達したのである。現在では東京の平地、安南、交趾支那、の海岸地帯、タイの國の一部に分布し、人口約千六百七十万を有する。十八世紀末二大侯が對立抗争をなせし時、それに乗じてフランスは一方に援助を与ふること により、安南を統一、更に宣教師の迫害せられるに及び、交趾支那を奪ひ、遂には安南を保護國としたのである。

安南族は身長は低く、皮膚は褐色、頭は短頭にして、顔は角張り、顴骨は突出し、目は斜のものが多い。頭髪は黒い。性格は禮儀を重んじ、平和を愛好するがあまり勤勉とは云ひ難い。

安南族は東京、安南、支那支那の平野を占據し、農耕を營み紅河メコン河下流の廣大なデルタ平野は米作地帶として著名である。佛印の米の生産額は全農業生産高の四分ノ三を占めて居ることは農民經濟に於ける米作の重要性を語ると共にその植民地としての立ち遲れを示して居ると云ひ得る。

彼等の農業は土地私有の認められてゐたのにも拘らず、一平方粁四三〇人の人口を有し均分相續が行はれる東京の平野では五畝以下が圧倒的である。零細な土地所有に立ち、從つて農民は、獨立した農民たり得ず、家族勞働によりて自給自足の生活に努めると共に血族紐帶によりて結合せられた宗族中心の封建的村落を〃成し以つてこれが協力保護にあたつたのである。又これが存在が爾後の農業の発展を阻止するものであつた。これに對して支那支那では、人口稀薄にして、華僑地主の下に或はフランス資本の下に土地は集中され佛印よりの輸入米は殆んどこの地の産であると云ひ得る迄に商品的米作が行はれ、農村の階級分化は促進せられて居る。この二

つの類型は又その農業の発展段階を示すものでもあり佛印の経済的基礎に横はる。 跛行的進行は後者が前者を前提となすことにより併存をなして居るのである。しかし佛印の根本問題は工業化の問題と関聯しつゝその主産機構の問題にかゝつて居る事を知らねばならぬ、農耕以外には未だ産業の分化は行はれず、フランス資本の下にその植民地としての役割を果して居るに過ぎない。しかしこゝに於てもその労動力の担当者たる安南族の封鎖的な村落組織がその伸展を阻害すること甚だ大である。農産物の主たるものはその他に綿花、玉蜀黍等あり、又水牛、牛、豚を飼育する、手藝に長し種々の工藝品をも作る。

安南族の本来の社会生活の基礎をなすものは家族制度であり、その上に血族紐帯によりて結ばれた村落共働体が存するのである。父は家長として家族に関するあらゆる權力を保有して居る。一般に儒教の影響を受けて、祖先崇拝、親孝行は道徳の根底をなし、血統を重ずる。このことは家族共有財産を有しそれは首長が相續し、譲渡を許さずして祖先の祭祀

を行ひ、それ以外の土地は男子に均等に分配する。このことは血族的集団たる村落にも通ずる。かくて彼等は村有田を有して、未だに村落共同体を保持して居るのである。この停滞的要因たる村落共同体の存在は安南族の農業を特色づけるものである。

結婚に於いても祖先の祭祀年祀執行をなす男兒を得んが爲に一夫多妻の習が行はれ、富者にあつては、その経済力に從つて數人の妻を有するが又貧者に於ては一人の妻も養ひ得ないものもある。

安南族の住家は簡單なものであつて、長方形で地上に直ちに立てられ、屋根は藁か、蒲蓬で葺き、壁等の骨組には竹を用ひその上を粘土で固める。富裕階級のものは更に進だものを建てるか何れもその入口の正面に祭壇を設けることには変りない。

安南族の服裝は男女ともに同一であつて、上衣は筒袖にて膝に達するもので、腰から上は体に密着するものを用ひ、帶は前にて結び、両端を垂る。それに男は緩かなズボンをつけ、女子は裾を着ける。色は黒、白

等の單調なものが多い。男子も以前は結髮をなしたが、現在では斷髮して居る。女子は束髮の如く結び、鳶色の綿布で包み、外出時には扁平な笠を頂くっ上流の者は下駄或はスリッパを用ひるが、下層のものは一般に裸である。

安南族の食事は米を元食となし、調味料として魚醤を用ひる、副食物には多量の野菜と少量の乾物、燻魚、豚肉、鷄肉等を攝る、又常時檳榔子を噛み、街上にありては到る所に吐き捨てる。

支那文化の影響を多分に受けて居る安南族は、又支那文化の所産たる儒教、道教更には佛教の信徒であって、これらの安南族の生活に及ぼしたる所は顯著である。就中儒教の思想の浸潤は非常なるものである。然し一般の信仰は古來から傳承し來った精靈崇拜に強く根ざしてゐて、以上の如き高教に接することにより何等の變更を蒙ってゐない。家族制度の如きも之等の信仰を儒教によりて組織を與へられたのであって、祖先崇拜にも根底には古來からの信仰が積って居るのである。かゝる狀態で

あるために以上の他にヒンヅー教も行はれて居るが同一人にして種々の守教を信仰して居る場合もあるのである。

言語はインジネシア語とタイ語との混和せしものを用ひる。

安南族は重税の收取と華僑、印度人の高利貸資本の下にある、自らの小農経営体とフランス資本の下にある大農経営体との跛行的発展により結果された窮境にあつて、農民解放を叫び、民族自主性の恢復を求めて居る。一方フランスは外國資本の進出を阻み、外國人の移住を極端に制限して居る。佛印の東亜共栄圏に於ける地政学的價値は戦略的であると共に、政治的、経済的、民族的である。フランス圧政に悩み、社會的に停滞を余儀なくされた佛印の雄族安南族の声は今こそ高く叫ばれねばならぬ。

なほ現在安南獨立運動には次の三派ありて、民族自決の意識を昂揚して居る。即ち越南國民革命黨、安南独立黨、越南共産黨これである。越南國民革命黨は王黨派であり、安南独立黨は佛國に留学せし青年により

て組織された共和派であり、越南共産黨は共産主義を奉ずるものであり、それ〳〵の立場に於て民族運動を展開して居る。

二　カムボヂヤ族

カムボヂヤ族はクメル族である、ネグリート族と馬來族との雜種で、更にヒンヅー族が混血したものである。かつては五世紀頃、カムボヂヤ王國を樹立し、アンコール、ワットのクメル文化は今にその遺跡を止めるが、その後次第に調落し往時の覇気を失ひ、その文化も衰亡し、安南族の勢力に圧され、現在では安南族と共に佛國の支配下に置かれて居る。現在の分布地域はメコン川の中流より下流にかけての流域、泰國の東南部及びコラット平地の東南部にして、其の数約三百万と云はれる。身長は安南族に比して高く、皮膚も黒い。頭は短頭である。その他タイ族に類似して居る。温和にして、柔順であるが迷信深く又佛教を敦く信奉するが故に忍従的性格を多分に有して居る。

河川流域、平野地帯に住するものは安南族と同様に米作を主となす農耕に従事する。これ又零細自作経営が支配的である。その他牧畜、林業、漁業に従事するものがある。安南族と同じく手藝に長じ、彫刻、絹織物等に因る可きものがある。

宗教はかつて波羅門教を信仰するものが多かつたが現在は大半佛教に改宗し、カムボヂヤ族の社会生活は全く佛教を中心として営まれて居り、その日常生活への浸潤は顕著である。これは、十才乃至十五才に達すれば僧院に入り、僧侶より教育を受け、やがて剃髪して佛門に帰依する一般の風習により深く植えつけられたものである。

カンボヂヤ族に於ては一夫多妻制が行はれるが正妻以外のものは購れるのである。離婚は簡單であつて、夫婦何れの側からもその要求をなし得る。婦人の地位も認められて居り遺産の分配は男女平等である。他族との結婚は原則として避けるが、実際は佛人、支那人との通婚もあり、多数の混血兒を見る。家屋、食事、は夫の地域により安南族或はタイ族と

大差なく、衣服も始ど同様であるが、サンポン称するものを用ひる事がある。これは布を股間を通して腰に纏ふのであるが、この場合女子は派手な肩掛を斜に胸にかけ、背と腕とを露出して居る。

言語文字はクメール語と称する南部印度の系統のものを用ひる。

三、チャム族

チャム族は馬來系に属するインドネシア系統である。現在は安南族に圧迫せられて、安南の最南部、カムボヂアの東南部に住し、その人口約十万四千であるが、他種族との混淆甚しい。容貌は歐洲人に似、皮膚は黑褐乃至赤褐色である。農耕を営み、米、玉蜀黍、煙草、棉、落花生等を栽培し、水牛、山羊、鷄等を飼養する。山地の蠻族よりやゝ良い程度の生活様式を有するチャム族には他の産業等未だに行はれない。

宗教は回教と、婆羅門教に二分せられて居るが同一人が同時に何れの宗教の教徒でもあるとえった、程度のものである。チャム族にて注目される

ことは女子の社會的地位高く、相續は女子を通じてなされ、子は母の名を繼ぐ事である。即ち母系相續が行はれて居ることである。結婚に際しても、女子が自ら相手男子を選ぶのである。離婚も容易であり、夫を変へる事も妻の意志のまゝである。然し女子は良き妻となり、不貞なものは極く稀である。不貞なるものあれば嚴重に罰せられる。

四、モイ族

モイ族はインドネシア族で、佛領印度支那の安南山脈の西斜面、安南の南部の高原地帯に住する蛮族諸族の総称であつて、二十一万と称せられる。

此の種族は風俗、習慣に於ても多種多様であつて、地方によつて異にして居る。一般に慓悍、獰猛な蕃族である。文化の程度は甚だ低度にして、主に狩獵を業として山中を彷徨し、その傍に農業を営む。その農業も極めて幼稚なものであつて、焼畑農法以外には行はず、その爲に一年の食糧を充分に確保することが出来ず、その補ひとして、又不作の場合の

食糧として、球根、木の芽或は蛇、ナメクヂを採し求めて飢を凌ぐと云ふ。その生活程度はこれによつても推察し得る。轉々と居を移すモイ族は杭の上に竹と藁にて簡易な家屋を組みて住む。

モイ族は精靈崇拝者にして、甚だ迷信深い原始民族であつて、多くのダブーを有す。民族宗教以外の宗教は信奉してゐない。

結婚は賣買婚であるが、女子は農耕を担當するものにして、家族内に於ける地位は高い。

五、タイ族（シヤム人）

タイ族にはタイ族（シヤム人）、コーラーイ、タイ族ラーオ族、等がある。

タイ族はモンゴール族の系統に屬し南部支那より南下し来つたもので、現在千八百万を下らざる人口を有し東はトンキンより支那の廣西省、多び海南島、西はアッサムに亘る地域に分布する種族である。泰國領内

に居住するタイ族は九百万人である。

シヤム人は泰國の東部を除く南半部に住し、人口約四百五十万にしてタイの支配階級をなして居る。先住民たるモーン族及クメール族の血を混じて、後には更に支那人の血を混じて現在のシヤム人となつたのである。

身長はやゝ低く、皮膚は暗色を呈し、頭は幅が広く、後頭部は平たく、顴骨は秀でゝ居り、目は斜眼である。頭が突出し、鼻が拡がり、大きな耳を有し、蒙古族の特徴を多分に持つて居る。一般には水運の発達が、脚、肩の著しい発達を促がすと共に、下肢の正常な発達を奪つて居る。シヤム人はその性、温順にして、宗教的良心強く、儀礼に厚い。これは又その性甚だ保守的であると観察される原因ともなつて居る。然し他面自由を愛好する心の旺盛な事もその性格の著きもの、一つである。その欠点とするところを擧げれば甚だしく商才に乏しいことである。

独立國家たるタイ國の支配階級たるシヤム人は民主体制の担當者であるが、シヤム人の社会構成発展の過程を見るに古代印度文化の影響が著しいが、平等を尊ぶ佛教の浸徹と極端な國王專制の発達とは、印度に於けるが如き固定的な種姓制度の如き社會階級の発達を阻止して來たのである。しかし國王を神とする古代印度に於ける思想と相俟ちて、三宝の守護者たる国王と三宝の一たる僧侶への畏敬の念は、現実に於ける国王專制によりて階級分化を結果したのである。貴族、僧侶、奴隷等の階級の存在は又その原理により世襲的なものと化す迄には至らなかつた。奴隷はラーマ五世によりて廃止され、一九三二年民主制を採用するに及んで貴族の数も漸減の方策を採つて居る。

佛陀入滅の年を紀元元年と定め、暦は四月一日を正月元旦となし。皇室にありては總ての儀式又佛式によると云ふタイは全く佛教の國である。君臣ともに佛徒にして、宗教的に統一せられた國である。シヤム人の社会生活も亦佛教を基軸として形成せられ、維持せられて居るのである。

國民は総て幼年時代に僧侶より教育を受け、男子は成年に達すると一度は三ケ月乃至一ケ年の僧侶生活をなし、禁欲生活を續け、讀経と佛教教理の研究をなさねばならぬ。貴賤を問はずして行はれるこの僧侶生活の体験は日常生活方般に亘つて佛教の浸潤を決定的なものとなすのである。僧侶の数は三十六万を算すと云ふ。タイ國に於て信奉される他の宗教は多く外來人のものであつてシヤム人の佛教に匹敵するものは絶無である。

國家的統一に貢献した佛教の功は大であるがしかし佛教の思想の浸徹は、物質軽蔑観を植え付け、経済観念の欠乏を來し、外國勢力に経済部門の実權を握らせる結果となつたことについてはその罪の大なるものがあると云はなければならない。シヤム人の営むものは僅に農業生産部門のみである。之云つても過言ではない。北東、南部及び北部では停滞的な封建的零細農が、中部では地主への土地集中とそれによりて惹起される自作農の小作農への転化が見られる。小作料の昂騰、零細経営は農民生

治の発展を抑制すると共に華僑を主体とする高利貸資本の勢力を助長して居る。英、佛等の外國資本は自國の利益保護を目的としてタイ國の開発を極度に阻害するが故に自らは封建的農村社会を持續しつゝ、徒らに外國資本の乱舞にまかせ、自國資本の蓄積はなされない状態である。かゝる封建的或は半植民地的性格、或はそれを脱却し、経済部門の自主より政治の自主性確保を目指す努力はその産業事情に著しい複雑性を附與して居る。農産物の主なるものは米が九七%を占め、商品作物としてゴム、甘蔗、コーヒー、ココ椰子が存在する程度で、他は農家の自給作物である。佛印に於て見られた如く植民地、農業は帝國主義による單一耕作化が強制せられるのをこゝにも見るのである。家畜としては、水牛、黄牛、豚が主なものである。

工業はその成立條件が具はざる爲に、小商品の家内工業の域に止り、工場手工業の発達さへ微弱なものである。外國資本に依存する軽工業は存在するが、外國商品と競合関係にあるものは成立せず。タイの工業は

全く植民地工業の様相を呈して居る。

タイ國に於ては水運の発達が著しい爲、家屋も水系に面して建てられ、部落も水系を中心として作られる。典型的な家屋は三個の長方形の家を正方形の三辺に配列した如くに建てられる。暑気、洪水に備へて地上一米半乃至二米の杭上に作られ床下を利用して家畜を飼育することがある。床、柱にはチーク、壁には割竹を編みて用ひ、屋根は草、ニッパ椰子葉、或は瓦等で高く急勾配に葺く。この他に浮屋と称するものがある。二、三隻の平底船の上に、前記と同様の材料にて作られるものである。

服装は、近来男子は洋服を用ひるものが増加しつゝあるが、その固有なものとして、白詰襟に、金釦の上衣、それに腰巻風のパヌンを用ひバンドを締める。下層階級のものは不断は跣足である。

女子は家の内にては乳房を隠す程度の肌に密着したパホムと称する袖なしのシャツを着、外出時は上に薄布の上衣を羽織る。夏はその上に腰シ

ヨールを纏ふ。パヌンを用ひることは男子と同様であるが、男子が無地のものを用ひるに對して、中形の花模様、或は唐草模様のものを用ひて居る。下層のものは女子も亦跣足である。

頭髪は男女ともに断髪にして分けて居る。男女ともに用ひるパヌンは長さ七呎半、幅二呎半の布にして、腰から膝の下部にかけ、後から前に巻いて結び、余つた両端を撚つて股間を通じて背面に廻し、巻いた布に挟じ込むのである。

パヌンの色合は曜日によつて異なり、慣習では日曜より順に、桃、銀灰、赤、緑、雑、水、濃青と定めてある。

食事は朝夕二回であり米を主とし、魚類、カレーを副食物として摂る。魚類として、鮮魚、乾製、塩製、かびと称する半ば腐敗した魚類の練物を用ひる。信仰の敬い佛教徒たるシヤム人は魚肉以外の肉食をしないのである。その他に少量の野菜、果実を食す。食事法は上記の物を小皿に盛りて指で食べるのが一般である。

嗜好品としては、砂糖で製せられた酒、檳榔子、煙草を愛用す。

シヤム人の用ひるタイ語は國語であつて、発音、言語ともに支那語に類似して居る。タイ語の文字はピヤルフシ王がタイ國創建の際、高僧頂学に作らせた独特のものであるが、印度文化及び波羅門教の影響を受け、サンスクリット系である。

タイの家族制度の著しい特徴は、家長の死亡毎に遺産を分配して離散し家族制に永続性のないことである、従つて戸籍法の制定を見る迄は、姓氏の必要もなく又存在もしなかつたのである。

シヤム人には早婚の風あり、かつては剃髪を終つた男子は將來の妻とすべき女子の家に起居し、或る期間夫婦生活をなし、その後正式の結婚式を挙げるのが例であつた。現在では男子廿一、二才、女子十五、六才が婚期となつて居る。結婚の資格として男子はそれ迄に僧侶生活と兵役の二つの社会的義務を果たさなければならない。結婚は多く身内同志で決定される場合が多いが、多くは円満に成立し離婚率は割合に少い。式は

儀式により、その後盛な饗宴が行はれるがこれに要する費用の高額に上ることが離婚率を引下げて居る理由の一つとも考へられる。然し中流以下では恋愛結婚、自由結婚も行はれて居る。蓄妾の風があり、経済力の許す範囲に於て蓄妾をなす。最初の妻即ち正妻を娶る時は、一定の儀式を行ふが、第二夫人以下は夫の自由により結婚、或は離婚をなす。正妻と離婚する時は、その同意と財産の分與とを要する。蓄妾の能力なき下層階級のものは屢々妻を代へ、女も平然と夫を代へるのである。法律的に最近改められ一夫一妻主義が採用された。

六、ラオス族

ラオス族はモンゴール族の系統に属し、雲南方面から南下して、先住民族と混血したものである。主として泰國の北半の高地に分布するものと、ラオマ地方からマラアヒ平原に居住するものとある。前者は白腹ラオ（ラオ・プン・カオ）と称せられ、約三百七十万の人口を有し、後者

は黒腹ラオ（ラオ、プン、グム）と称せられ、約二百万に及ぶ。両者の類別は黒腹ラオが下半身に刺青を施して居るに対し、白腹ラオは施してゐないのであつて、人種的差異を示すものではない。この他にもビルマの東北部、支那の広西省、海南島等に居住するものがある。

一時はビルマ、安南、カムボヂヤを勢力下に置いたが安南人に圧迫され現在の如き分布状態を有するに至つたのである。泰國政府はラオス族をシヤム人として取扱つて居る。身長は中位、皮膚は白色、短頭で広鼻を有す。比較的体格が良い。彼等は一般に快活にして音楽を愛す。北部の黒腹ラオは堅忍不拔の意志を有し又勤勉であり宗教的良心に富むが、東部の白腹ラオは男子は懶惰で女子の方が勤勉である。

生業は一般に幼稚な農業をいとなみ、漁業、狩猟にも長じて居る。南ラオスでは機織や家畜の飼育をいとなむものもある。ラオス族の家屋も亦舟の便の多い河川の沿岸に作られ、床は地より一、五米乃至二米位の高さである。シヤム族のと同様屋根は高くして傾斜は急であり藁葺が普

通である。建築材料は主として竹である。内部は一般に三部屋に分れ、一つは共同用、他は家族専用に用ひられて居る。

服装は一般に男子は藍色の木綿の胴着に寛かなズボンを穿く。婦人は木綿の縞目ある踵まで引く裳をまとひ、胸は幅広の布を捲きて乳房は露出して居る。男子は頭髪を三、四糎のこし周囲を刈り上げ、女子は長髪を束ねてリボンで結ぶ。

主食物は米であり、葉に盛って食し、副食物として乾魚を焙いて塩水に漬けたもの或は生豚肉を細断して胡椒と魚醤に浸したものを用ひる。

彼等は佛教徒であるが、その教儀は墮落し、活物崇拝的色彩が濃厚に存し、迷信に強く一種の呪術を専らとする淫儀邪教と化して居る有様である。

言語は他種族の要素を加へ方言的な変音があり、多様に変化し、文字も亦多くの種類がある。

結婚はやはり早婚の風がある。式は佛式によりて行はる。

五四

七、ビルマ族

ビルマの土着民族の主なものはビルマ族約七百六十四万人、シヤン族約百万人、カレン族約九十二万人、アラカン族約三十四万人、タライン族約三十二万人、ケン族約三十一万人、カケン族約二十四万人である。

この分布地域は大体次の如くである。ビルマ族は主にビルマの中央部から南部にかけて分布する。シヤン族は東はラオス地方から西はビルマのシヤン山地に及ぶ。カレン族はタイ國の西北部山地よりビルマのカレン山地及大三角州の一部に亙つて居住する。アラカン族はアラカン山脈地方に住し、タライン族はビルマの南東部を中心として分布する。

ビルマ族は西藏族の血を引き、日本人、支那人と酷似する体型を有す、体軀はやゝ小さいが、頑丈である。皮膚は薄いが黒褐色乃至赤褐色を呈して居る。頭は平たく、毛髪は黒く、男も髭が少い。性は温順であるが、勤勉とは称し難く、創造力にも乏しく、又他種族の圧迫は、ビルマ族の性格を陰険或は猜疑心の強いものとなした。

ビルマは地勢的に二つに分つ事が出来る。一つは北部ビルマの高原地帯であり、一つは南部ビルマの肥沃な平原地帯である。この両地域は歴史的社会的條件をも異にするのである。

即ち北部はビルマ人の中心にして人口稠密であって、封建的色彩が濃厚であり、南部はイギリスの支配下に入った時期早く、北部より早く、商品經済の段階に入ったのである。從って國民の八割を農民とし米作農業を主体とする。

ビルマの農業も南北二つに分って観察するのが適當である。北部に於ては自給自足的な農業であり分割相続による土地の細分と、世襲的小作人の存在を特長とし、南部に於ては商品經済の進展により農法の改良が行はれ土地の集中に伴ふ地主階級の発生を見、自作農の小作農への没落農業労働者の分化を將来したのである。ビルマの農業事情は佛印の場合と同じ形態をとって居る。ビルマの土地が不在地主、主として印度人の

掌握する率は全耕地の約六割を占めると称せられる。農業の季節的繁閑は印度人移民の流入を誘き、こゝに又新しき問題の発生を見てゐるのである。農産物の主なものは、米、胡麻、豆類、落花生、棉花、玉蜀黍、ゴム、茶、煙草等がある。

家内工業もイギリスの支配下に入る事によりて、その存在の基礎を失ひ、イギリス資本の市場と化したのである。

ビルマへの外國資本就中、イギリス、印度資本の投資は、一つに農民への融資であり、南部ビルマに於ける農地も多くは彼等の手中に帰りて居るのである。植民地の資本の蓄積を、抑制策と反面本國資本の発展に努めんとする。植民地に對する本國資本の投資の典型的なものを見るのである。

ビルマの社会組織はイギリスの勢力の浸潤につれてその行政機構も彼等の手によりて組織化されたのである。ビルマ民族の自主性の欲求の次第に高まるのを利用してイギリスはビルマをインドより分離し、印度民族

資本の発展を阻害しその民族運動を牽制したのであるがこれは一面ビルマに對する英國の支配の強化に外ならない。ビルマには特に北部ビルマには封建的社會と近代的社會との混在を見るのである。

住居の多くは木、竹、樹葉を材料として作られた床の高い堀立小屋である。

ビルマ族の男子服裝は單色の短衣を着け、腰から下へは、ルーンギと称する幅の廣い布を巻付けその下端は踵に及んでゐる。男子はルーンギの端を身体の前で止めて居る。頭髪は束ねて、單色の絹又は木綿でこれを巻いて居る。女子の服裝は男子と同様であるが、ルーンギの端をたの横で止めて居る。頭髪は高く巻き上げて、飾りを付けることはあるが、男子の如くに布は巻かない。男女とも下層社会のものは多くは蹠足であるが上流のものは獸皮製の雪駄の如きものを履いて居る。

シャン族ノ服裝は男子は白色の上衣に寛い黒色のズボンを穿き、頭には布を巻いてゐる。女のはうーオ族の服裝に類似して居る。

カレン族の服装は色彩を異にするがシヤン族と類似して居る。男子にはサルンを用ひるものもある。特異な元服に相當する風習を挙げれば男子は僧院生活に入るに先だつて臀部に動物の形或は文字を黥し女子は十二、三才になると耳墜に孔をあけ、金、銀等の環を通すのである。

食事は朝夕の二食主義である。米を主食物とし、副食物として野菜、魚類、果実を攝るが獣肉は余り用ひない。マレー人、印度人と同様に三本の指にて食事をなす。嗜好品として煙草を愛好するが檳榔樹の果実に石灰の練つたものと、香料を加へ、菊醤(キンマ)と云ふ植物の葉にて包み、これを噛む風習がある。

ビルマ族は小乗佛教を信奉するが、その日常生活に與へる所は甚だ多く、社会生活も佛教を基礎として成立つて居る。僧侶の数より見るも僧侶七万、尼僧五万と云はれる。貪しき民族の姿と美しき佛塔とはビルマの國情の象徴であるとも云はれる。ビルマ族を熱心な佛教者となして居る事はその子弟に施す教育によりても知り得るであらう。男子が七、八才に達すると

僧院に通ひ、僧侶より教育を受け、十三、四才には僧院に入つて剃髪し、新発意（小坊主）の生活をなすのである。この期間は一定しないが最近は次第に形式化され僅に一週間のこともあると云はれる。

佛教の信仰は種姓制度の発達、婦人の隔離の風の発生を阻止したのである。結婚は早婚であり、男子は結婚の資格として僧侶生活をなすことを必要とされて居る

カレン族は殆ど精霊崇拝者である。少数の佛教徒、キリスト教徒もある。一夫一婦制にして他種族との雜婚は稀である。ビルマ族の言語は西藏支那系に属する。他族のものはモンクメール語系である。

政治的にはイギリスに、経済的には印度人にその命脈を握られたビルマ族の民族自主の運動は印度人勢力の排除に端を発し、ビルマ人のビルマ建設を要望し、ビルマ独立を希求して居る。ビルマ人の生活の中心たる佛教が新たな指導力を獲得した時ビルマ民族の民族運動も亦新しき段階に入るであらう。

八、黎族

黎族は現在殆ど海南島の山地にのみ居住して居るものにして、印度支那系の種族である。總人口は約五十万と称せられて居る。身長は支那人と大差なく、皮膚は銅色が強く、頭は中頭にしてやゝ長く、顴骨は秀でゝ居る、目は水平にして、蒙古襞を有し、頭髪は直毛にして黒く体毛を有するものも極めて少く、鬚を有するものも稀である。通常黎族を分つに生黎と熟黎となすが、後者は前者の漢族化したものを云ひのである。

黎族は同族にて二、三十戸乃至百戸の聚落をなし、その長を有して生活をなす原始的な農耕を営み、稲作を主とし、薪炭、木材を製する、家畜としては農耕用の黄牛のほかに豚、鶏を飼育し、漁猟をなすものもある。女子は織布を業として居る。

家屋は一般に長方形のものであつて、柱、梁には木を用ひ、壁には竹或は樹皮を編みてこれに泥を塗り、屋根は茅で葺く。

衣服は簡易なものにして、男子は褌に類するものを用ひるにすぎず、

中には漢人の服裝をなすものもある。頭髮は長くし、弁髮をなすもの頭には布を巻くものなど種々ある。女子は二つ襟で、釦なく、襟の下で銅線を以つて結び居る。又女子は何れも銅製の耳環を下げて居るが、これは直径三糎程度のものより二十糎位のもの迄ある。

食物は米を主食とし、自家生産の野菜類を攝る。

女子が成年に達すれば、父母は別室を建てこれに住まはせ、自由な交際を許すのが一般である爲、結婚も極く少數のものは媒介人を立てるが、自由に相手を選ぶことが多い。女子が結婚前に文身をなす風習が存したが、次第に減じつゝある。この文身は同族の標であり、各種族ごとにその方式を異にするものであり、その方式も古くより傳へられたものである。更に護身の意義も有し、又裝飾でもある。

黎族は文化程度も低度であり、文字を有せず、物々交換をなし、必要に應じては簡單の符号を用ひて居る。

九、バタック族

スマトラ島にはバタック族、アチニーズ、メナンガボール族等が居住する。何れも原馬來等に屬する。

バタック族はスマトラ島の中部地方の山地に住し、人口約百二十万を算するスマトラ島の代表的蕃族である。ボルネオ島のダイヤ族と類似して居る。射倖心が強く、その爲に人の奴隷となるが如きこともある。

バタック族の社會階級は貴族、平民、奴隷の三階級に分れて居る。貴族は酋長並にその子孫であり、奴隷は捕虜或は破産の宣告をせられたものである。

村落は三十戸乃至四十戸であって、周囲に土壁を繞らしてある。村落民は男系親族で構成せられ、村落の中央には集合所を有して居る。一棟の中には數組の家族が同居することもある。男系相續である。結婚は一般に早婚であり、族外婚が行はれ多くは母方の從姉妹と結婚する場合が多い。貴族階級では二妻以上を蓄へて居るものもある。

家屋は堂々たる木造家屋であつて、床下約二米、長さ約十米、巾約五米半であり、屋根は鞍形に弯曲して居る。

多くは農業を營みて自給自足の生活を營む、即ち水稻、陸稻、玉蜀黍を栽培しこれを主食物として居る。家畜としては水牛、馬、豚を飼養して居る。珈琲、煙草等を栽培し、又機織、土器製作金屬細工に秀れたものを出しこれを以て種々の日用品の交換に当てゝ居る。

農業労働は主として婦人によつてなされて居る。宗教は回教を信奉するものが多いが近年キリスト教の布教の効果著しくキリスト教に改宗するものも現れて來て居る。しかし未だ精靈崇拜を主とする民族宗教を信じて居るのが一般である。

言葉はバタック語と称せられる馬來系の言語を話し、文字は独特なものを用ひて居る。他の蛮族に比して可なり高度の文化を保有して居るが、かつてヒンズー文化の影響の著しかつた爲である。

一〇、アッ千ニ族

アツチニ族はスマトラ島の北部海岸地方に居住する原馬來族に屬するものであるが、雜多な混血種族であり、皮膚は馬來人より暗色であつて、複雜化して居る。人口約八三万を有し、性は活発にして慓悍であるが又比較的柔順である。かつてはアツチニ王國を樹立して海峽植民地の一部に迄その勢力を揮つたことがあり、和蘭もその統治に於て最も惱まされた種族の一つであつて、一八七三年より一九〇四年迄三〇年の長日月を要して、征服したのである。

家族制度は男系相續であり一夫一婦を原則とし、血族結婚を禁じ、族外婚を行つて居る。

米作を主とする農業を營み、又漁業にも從事する。

木造家屋に住し衣服は股引の如きものを穿き、女は粗布を頭に被り、處女は前髪を下げて居る。

宗教は回教を信じて居る。

二、ミナンカボウ族

ミナンカボウ族はスマトラ島の南部に居住し、現在東印度諸島に広く分布して居る近代馬來族の祖と称せる様、旦つては王國を樹立し、スマトラ全島より馬來半島の一部に迄その威を張り、馬來文化の完成者でもあつた。その数約二百万を算するが、專ら母系社會の存続せる事に於て注目せられて居る種族である。近代馬來族中には母系社會を有するものもあるが、最も純粋な形をミナンカボウ族に見るのである。

同一血族内の結婚は禁ぜられ、女子は結婚後猶母方の家に起居し、夫は自分の母親の家より妻のもとへ通ふ。一切の權利は母方が有し、長姉の血統の長男がママク（家族首長）と称せられて、家族の財産管理者となる。土地の譲渡は行はれず、かゝる場合が生じた時は家族又は種族團体たる部落の所有に歸するのである。同一父系の数家族は一家屋内に住し、[illegible]族の居住様式を有する。社会階級には貴族、並に司祭者が存する。

農業を営み、木造家屋に住し、衣食住いずれもにパタッタ族に類似して居

る。

宗教は回教に改宗したが猶この母系社会は存続して居る。

言語は馬来語を話し、文字はアラビア文字が用ひられて居る。

一二、ブキ族、マカッサル族、トラジャ族、ミナハサ族、トアラ族

ブキ族はセレベス島の南部に住し、原馬来族に属するもので百五十万の人口を有する。セレベス島以外にもボルネオの海岸地方、マレ半島、スンダ列島等に分布して居る。

身長は中位で、皮膚は暗褐色、廣顔で、やや平たい鼻を有す、頭髪は黒い。性質は活潑にして機敏である。

農耕を業とするが、機織にも秀で、商才にも長じて居る。

一棟一家族のものが多く、家屋は竹又は木材を以て組み、屋根はアタップを以て葺く。床は一米半乃至二米の高さにて、床下に家畜を飼育する

か、農具の置場となして居る。

回教を信仰するが、ヒンヅー教徒も居る。

マカツサル族セレブスの西南部半島の西側に居住し人口約六十四である。外貌、風俗等ブキ族と類似するが、言語を異にし、マカツサル族は自らブキ族に優れて居ると信じて居る。性質は嫉妬深く、復讐心が強い。回教を奉じて居るが、精霊崇拝も盛である。

トラジヤ族はセレベス島の中央部に位し、人口約五十六万で、他族と異へた風習を有して居る。スマトラ島のバタツク族、ボルネオ島のダイヤ族、前述のブキ族等も同一の系統で、原馬来系に属する。性は至って怠惰である。未開の蛮族であって、かつては首狩をなしたこともある。現在は農業に従事して居る。女子が主に働き、女子の社会的地位は高く、結婚に際しても女子が夫を選ぶ権利を有して居る。生活単位は大家族、小家族が存るが何れも家族であるが、土地私有は行はれず、部族或は民族の如き集團に属して居る。山間に住する家屋は砦の如きものにして数家族が同居して居る。

男女ともに頭髪を長くし、幅廣の褌を締めて居る。他の文化の進む種族と接するものには馬来風の服装をなして居るものもある。

精霊崇拝　あつて、天を父とし、地を母とし、その居住地も谷間に設けて居る。

ミナハサ族はセレベス島の北東端のミナハサ州に住するもので、皮膚は割合に白く、頭髪は黒く、鼻は高く、容貌美しく、文化程度進みて、頭脳又優秀である。人口約二十八万を有する。

かつては首狩を行ふなど野蠻な種族であつたが、現在ではキリスト教に改宗し、欧洲文化の洗禮を受け、南洋土人の中に於て最も進歩せる生活様式を有して居り、下級官吏、學校教師、軍人等に採用せられるものもある。

トアラ族はセレベスの原住民族と称せられるもので、ヴェダ系に属し、身長は小、皮膚は褐色、頭髪は縮れ、鼻は扁平である。山中を彷徨し、或るものは遊牧生活をなすか、他種族の奴隷となりて全島に亙つて全

島に亙つて分布して居る。人口は不詳である。

一三、マレー人

マレー人は馬来半島、東印度、フイリツピン諸島の土着民中ネグリトを除いたもの、總称であるが、狭義には馬来半島の南端、スマトラ島の中部及東海岸、ジヤワの北岸、ボルネオの西及び南海岸、その他東印度諸島の各島の海岸に分布して居りその数約二百二十三万に及ぶものを指すのである。

こゝには馬来半島に居住するものを中心として述べる。マレー半島に住するものは約百九十七万にて全人口の約四五%を占める。しかしその本質は何れに属するかと云へばスマトラより北上せし開化馬来族を基幹として、東西人種の複雑な混血の下に出来上つたものと思はれる。

マレー半島に於ては支那人、印度人が全人口の約五〇%を占めて居ることは、マレー人の経済的発展の低度なるのを一層後方へ追ひやる傾向にある。即ち、マレー人は自足的経済の段階にあると共に、外國資本の侵入は、印度人支那人にその労働力を求めマレー人をその労働力の給源としなかつたのである。

マレー人は外國資本の各産業部門に對する投資に無関係に水田稲作を主とする家族労働による自足農業を營んで居る。

家畜としては水牛、牛等を飼育する。漁業に從事するものもある。

マレー人の大多数は回教徒である。

一四、ジヤクン族

ジヤクン族はマレ半島の南部パハン、ネグリ、スムビラン及ジヨホール州に住するプルト、マレー等の種族である。混血甚しく、地方によつて変化し、一般の標準と稱す可きものはないが、特に著しき特長を挙げれ

ば頭髪は黒く直状、両眼も亦黒く、傾斜し外方に上り顴骨は秀いで下顎は角張つて突出し、鼻は扁平である。

定住することなく、山中を彷徨し、野生の果実、獣を採り、海岸のものは漁獵をなす。それぐの地域に於て他種族の影響を受けその生活様式、社会組織にも種々なもと見られる。

言語はマレー語を用ひ服装もマレー人の服装をなしてゐる。

一五、パプア族

パプア族はニューギニアに住し現在の人種中最も原始的なものの一つである。身長は矮小にして、皮膚は黒褐色、頭は長頭にして長く細く、頭髪は縮れて居る。

トーテム共同体及び家族共同体を有し、土地は共同体のものであり、共同生活を營むで居る。社会組織は母權制であり、母系氏族群が存在し、

族外婚をなす。

現在なほ首狩、人肉食が行はれ、全くの原始生活をなし、サゴ椰子、バナナ、山薯等の野生のものを食するが故に、未だ農業も行はれず、漢獵を主となすものが多い。地方によつては原始的な農法によつて、甘藷、里芋を栽培し、時には玉蜀黍、米を作るものもある。小屋の周囲などには南瓜、蚕豆、バナナ、サゴ椰子、煙草等を栽培して居る。

家屋は杭上に立てられ、屋根は棕梠の葉を以つて葺く。衣服は簡單な裸様のものを用ひるが、裸体である。

言語はパプア語を用ひる。

一六、ネグリトー族

ネグリトー族に属するものにはフイリツピン群島のアエタ族、マラツカ半島のセマング族、大アンダマン島のミンコピー族等がある。身長は低く、皮膚は暗褐色、頭は小さく、頭髪は羊狀毛であつて蜜縮して居る。鼻は扁平で、口が大きい。性は慓悍である。

ネグリトー族は氏族集団をなし、共同家屋にすみ、所属員は平等の権利を有して居る。未だ私有財産の発生を見ないが、個人的使用物は個人の所有であるが、獲得された食料等が全員の間に分配せられ、定住して耕作をなすものにても猶共同耕作、收獲物の分配が存する。酋長の存するものあるも大きな権力を有して居ない

原始林中の野生の動植物を採取して食するもの多く、定住するものは極く一部に過ぎない。ルソン島のエータ族は原始的な農耕に移り、主として玉蜀黍、薯蕷、南瓜を栽培し、米、小蕪菁等も作る。

家屋は一般に長さ十五米乃至二十米のものであるが家族数によつてその

家屋の大きさも決定せられる。

床はなく、地面に椰子の葉などを敷き、屋根は簡単な差掛屋根に過ぎない。

エータ族は一、二米乃至一、五米の高さの床を有する小屋を作つて住む、多くは共同家屋であつて、各室は竹壁等で仕切られて居る、服装は打つて柔かくした樹皮製の腰巻き用ふ。

一七、ダイヤク族

ダイヤク族は原馬来系統であつて、蘭領ボルネオに約六五万、英領北ボルネオに約二〇万居住して居ると云はれる。種族的には一般にクレマンタン族（陸ダイヤク族）、ムルット族、ケンヤ族、プナン族、カヤン族、イバン族（海ダイヤク族）の六種族に分つて居る。この外にウル、アエル、ダイヤク族があり、前述の六種族と体質的にも著しい差異を示して居る。

一八、其他の小種族

クレマンタン、ケンヤ、カヤン、ムルットの四種は同一種族では無く体

質的には差異を認められるがその生活様式の類似して居る点が多い為に一括して述べる。

勤勉にして、柔順な性質を有するが、かつては宗教的原因によつて首狩を行つて居つた。多くは聚落を營み、大河の中流の河岸等に於て大部落を成し、社会階級は酋長、平民、奴隷の三階級に分れ、家族は大家族制にて、大家族が経済単位をなして居り土地は部族、時には氏族の如き比較的大きな集団に帰属して居る。社会階級の分化の著しいものはケンヤ、カヤンに見られ、ムルット族では酋長の権力が他族程大ではない。奴隷に充てられるものは他蕃社との闘争によりて得られた捕虜である。婚姻は族外婚が行はれ相続の際父の遺産は男児が、母の遺産は女児に分配されるが長男には他より多く分配されるのが一般である。

家屋は有名な大家屋であつて長さは二〇米位のものから五〇米に及ぶものさへあり、巾は約三米であつて、五米内外の支柱の上に建てられ、内部は縦に二分され、一つは若者、未婚男子の共同部屋であり、他の一つは既

婚の家族員及び女子達の小部屋に区切られて居る。この大家屋には三、四家族時にはそれ以上のものが居住して居ることがある。更にこの大家屋は他のものと厚板等を渡すことによりて結ばれ、恰も細長き長屋の如くにてその長さ百五十米に達するものも存する。

女子は短い布片を腰に纏ふものもあるが、男子は褌に似たものを用ひるが、全裸である。又女子には胸部より腰部にかけて籐にて作つた環を巻いて居るものがある。

宗教は多く原始的な精霊崇拝の民族宗教を奉じ、前述の如く土地が部族時には氏族に帰属して居るのも土地の終局の所有者が或る種の神霊であると信ぜられて居ることによるのである。

何れも農耕に従事し、山腹の森林を拓いて焼畑によつて陸稲、玉蜀黍、甘藷、山芋、南瓜、甘蔗等を栽培し、低地に於ては水田を耕作し、水稲を殖るものもある。四種族中ムルツト族は農耕技術に於て最も秀れ、灌漑等をなして、階段耕作をなす、又ムルツト族が四種中に於て最も農業が盛で

ある。家畜としては豚を飼ひ、好んで狩獵をなす故、狩獵用の犬を飼ふ、狩獵には何れも原始的な、槍、吹矢、を用ひ、漁獵には魚扠、網を用ひ又毒流しによつて魚を捕る。カヌーの製作、操縦に長じ、これを以て交通する。何れも手藝に長じて居るが、就中、カヤン族、ケンヤ族は剛刻、機織、編物等に優れたものを出し、機織の術もかなり高度の発展をとげて居る。

プナン族はボルネオ島の山中に棲む種族であつて、身長は中位にして皮膚は前述の四族に比してより明るく、頭は幾分短頭的である。人種的系統も前述のものに比して、古きものに属するものである。性格は到つて温和であり、かつて首狩の如き事をなした事がない。小群をなして原始生活を営む、プナン族は文化程度もより低度であり、社会組織も分化せず、酋長的存在もなく、支配的階級、被支配的階級も存しない。

山中を彷徨し転々と居を移すものなれば、一定地に住する農耕の如きものを営むものもなく、食物としても野生の動植物を漁る程度であつて。従つてその住居も畢に雨露を凌ぐに過ぎない簡易な小屋にして、永住的なものを

有しない。日用品等は他種族と自ら採取せし林産物即ち野生ゴム、樟腦、籐蔓之を以て交換して購つて居る。

ウキト族もプナン族と四種の原始民族でありその生活様式等もプナン族と殆んど差異がない。

イバン族一名海ダイヤクとも称せられボルネオ島の山地より低地にかけて廣く分布して居る種族であり、ダイヤ族中最後に渡来して来たものと推定せらる。

イバン族の体質的特徴を記せば前述のムルット族に類似する点が多いのであつて、短躯にして、皮膚は前述のものに比して遙に暗色である。頭は短頭である。性格は甚だ慓悍にして、戦闘的であり、首狩も盛に行はれて居た。前述のものに於ては首狩が宗教的動機によりて行はれたが、イバン族に於ては何等宗教的動機に因らずして、先住民族の影響を受けたものであり、社会的地位の獲得の為に行はれたものである。後来者であり、その影響の多くは先住民族のものを受けたのであるが、海岸地方のものには殆

化馬来族の影響もあり、文化程度は上述のものより数等進んで居る。
農耕を業とし、食糧として低地のものは水田耕作をなし、山地のものは陸稲の栽培をなして居る。その他に玉蜀黍、甘藷、甘蔗等も栽培して居る。
原始宗教を信奉するが、周化馬来族の影響により回教に改宗して居るものも相当数存在する。
バジョ族は原馬来系に属し、ボルネオ東海岸の北西部及び北部セレベス島の沿岸の各所、更には東印度諸島の各地に集つて居る。身体強健にして性甚だ勇敢であり、かつては海賊として近海を荒らしたが現在は多くは一年の大半を舟中にて妻子と共に生活をなし、漁業に従事して居るが、中には海岸の波打際に杭を立て、その上に簡単な小屋を組んで居るものもある。ボルネオ北西部に居住するものは陸地に定住し、本来の海上遊民たる性質を失つて居る。

一九、ジヤバア族

ジヤバアにはジヤバア族のほかに、エンダ族、テンゲール族等、なほマヅラ島には主としてマヅラ族が居住して居る。ジヤバア族は主として中部東部にかけ、分布し約二千八百万の人口を有し、スンダ族は西部に居住し約九百万、テンゲール族は東部のテンゲール山中に住する蛮族にしてその数は不詳である。マヅラ族はマヅラ島に居住し、その数約四百万を算する。何れもマレー族に属するか、ジヤバア族は黄馬来族とネグリト、ヒンヅー、パプア、ビルマ支那等の雑種と云ひ得る。又テンゲール族はスマトラのバタク族、ボルネオのダイヤ族と共に比較的純粋に黄馬来族の姿を止め、現在馬来族の代表的なものとされて居る。

ジヤバア族は身長は中位より稍々小のものあり、皮膚は黄色にして明暗種々の程度がある。頭は短頭形、中頭形のものが多く頭髪は黒色で粗剛である。顔は中長、顴骨は秀で、鼻は広くしかも扁平、目の虹彩は暗褐色、蒙古襞を有す。総じて蒙古族の特長を有する。テンゲール族は身長は低く

皮膚は褐色にしてやはり明暗の程度に種々あり、頭は中頭形が多く、頭髪は黒く、粗剛である。

ジャバア族は温和柔順な性質を有する。テンゲール族はボルネオ島のダイヤ族に類似のものなれば、こゝに詳述するを避け専らジャバア族に就て記すこととする。

蘭印に於ても農業政策が植民政策の根底をなして居ることは変りない、農村社会はジャバア族の社会を代表するものである。一方に於ては和蘭の勢力下に於てその発展が促進されつゝあるが、猶固有の文化を有し、その上に立つ封建的な段階を固執して居るのである。即ちジャバアに於ては発展の諸段階の雑然たる様を見るのである。

土人社会は村落共同体を中核となして居る。村落共同体は社会的、宗教的、経済的な結合であり、村落を中心として、村民間には相互扶助がなされ、共同生活がなされて居る。殆んど総ての灌漑田は村落共同体に属して居る。然し乍らこの灌漑田は村民への割当が確定せられて居る為、事実上

は世襲的な私有財産と化して居る。その他私有財産とされて居るものは庭墾地、屋敷地、乾田である。

ジャバアの主なる産業は前述の如く農業であり住民の多くこれに従事するのであるが、農業にはエステート農業と土民農業とがあり、前者は和蘭人の近代化せる経営方式によるものである、後者は固来の幼稚な方式によるものであつて住民の農業はこれに属して居ることは論を俟たない。蘭印は住民の民族資本の蓄積を抑制し、その民族意識の昂揚を抑圧せんが為にこの二つの生産方式は維持存続せられて居るのである。甘庶、ゴム、煙草、茶、珈琲、規那、油椰子等はエステート農業によつて多く栽培され、ヨーロッパ資本の下に営まれて居る。又この発展を促進して居るものは低廉にして豊富な労働力の存在であるが、これはエステート農業と対抗をなす土民家族農業の零細性に依存して居るのである。こゝに蘭印に於ける土民農業の維持の根據が存するのである。しからば土民農業はいかなる方式に於て営まれて居るかと云へば、本来自給自足的なものであり、水田米作を主

とし、玉蜀黍、大豆、カツサバ、落花生、煙草等の自給作物がある

家畜としては水牛、牛、馬、山羊、羊、豚等が飼育されて居る。副業としては煉瓦焼き、燻作り、コ、椰子油の採取、テムペの調整等を為す、農民の農業の従事するものを類別すれば、土民農業に属するもの約七百九十万人エスステーし農業に属するもの約九十六万人である。土民の耕作面積は七百七十四万ヘクタールである。一人当りの耕作面積を出せば一ヘクタールに充たない状態である。もつてその零細性を知り得るであらう、かつる零細農業は村落共同体の形態に於てその崩解をさゝへて居るのである。勿論農民の間にも階級分化の進みつゝあることは事実であり、一部には資本家的経営、農民のプロレタリア化を見る。

商業は華僑の手に、工鑛業は先進資本主義就中和蘭の手中にある状態である。

家屋は聚落をなして部落を構成しその周囲に溝を繞らしてあるのを見る石造りのものから アタップで葺き、竹を柱とし、アンペラを敷いた簡易な

もの迄ある。一家族一家のものが主であるが一棟に数家族が数室に分れて共同生活を営むものもある。西ジャバアのものは概して床が高く、東ジャバアのものは一般に床が低いのも地理的條件のしからしめるところであろう。

食物は米食を主食とし、果実、野菜、塩魚、獸肉テムペ等を副食物として摂取する。三本の指で食することもその文化程度を示すものの一つであらう、衣服は多く半ズボンを穿き、短い黒い上衣を着し、頭には布を巻くが最近農夫は色模様のサロンに白の上衣を着け、頭布の代りに帽子を被る様である。女子は黒又は青色の上衣を着け、頭髪は後頭部に束ねて居るのが多い。

宗教は精霊崇拝のテンゲール族を除いては殆ど回教を信奉して居る。蘭領東印度に於ては住民の約九割が回教徒であつて、その中心がジャバア、スマトラである事によつても回教のジャバア島に於ける勢力を知り得るであらう。回教は一四世紀に印度教、佛教の後に渡来して、その位置を奪つたの

である。しかしこの勢力を得た事は政治的理由によりて住民に強制せられたことにもよる。メッカに旅することをその生涯の念願として居ることはその生活に対する回教の侵潤を物語つて居るものである。かく回教を信奉するが、なほ精靈崇拝は未だに存在し、呪術等盛に行はれて居るのを見る。言語は全く種々なものが用ひられて居るが日用語にはマレー語が用ひられて居る。文字はかつてはアラビア文字であつたが次第にローマ字綴りに改められた。勿論公用語は和蘭語である。

ジャバアに於ては家族的結合は甚だ強固であつて、家長は家族員により最大の尊敬を受けて居るのである。

ジャバアに於ける結婚は早婚であつて男子十七才、女子は早いものは十二才位に於て結婚生活を始めるのである。家族的結合の強固な事は、結婚に於ても両親の選擇関係者一同の同意と云ふ事が絶対的な要件とせられて居る。結婚後新夫婦は当分の間、夫か妻か何れかの両親の家に同居することが珍らしくない。離婚は至つて簡単である。

夫は妻の要求する一定額を支拂ふことにより妻を離婚し得、又妻も三ケ月たてば再婚も可能であり、死別の場合に於ても十日後には再婚が出来得るのである。回教徒であるが故に一夫多妻制が行はれ富裕なものは四人迄妻を蓄へる事が出来る。

ジャバア族は蘭領東印度諸島に於ける土民の中核をなすものなれば、ジャバア族を中心としてその民族運動を見るに、その政治的要求は勿論、和蘭よりの独立であり、民族主義的の傾向を有するのである。最近に於ては社会主義的色彩を加へて居るが、一般には民族自覚も未だ明確ならずして、その運動も啓蒙運動的段階にあると云ひ得る。その政治的要求を達成せんとして組織されて居る政党は十以上に及んで居る。主なるものを挙げれば、土民派と和蘭本國の利益代表たる政党とに大別せられ、前者ではインドネシア党が最も有力であり、その外には立憲政治を標榜するブデイ、ウトモ党、民族自決を叫ぶサリカット、イスラム党等があり、後者には政経党等があるが、その勢力に於ては國民参議員の相当数が官選であるため前者は後

者に対抗することを得ないのである。

二。、バリー族

バリー族はバリー島及びロムボック島に分布し約百十万の人口を有する馬来族に属しジヤヤ分人と変りない。

バリー族に於て婆羅門教を信ずる事は廣く知られて居るところである。回教が東印度諸島にその勢力を有するにもかゝはらず、バリー族を回教に改宗せしめることは出来得ないのである。しかし婆羅門教も決して純粋なものに非ずして、民族宗教的色彩も濃厚であり、番神ラクサをも神位に加へて居るのである。婆羅門僧はその社会に於て最高位にあり、貴族、士族の順である。

ジヤヤ人と異るところは女子が労働に従事することとその家屋の建築に主として粘土、自然石を用ひることである。バリー族の代表的な家屋は長方形のものであつて、米倉、寢所と料理場、家寺の三つの部分よりなり、

粘土で固め、或はアタップを以て葺く、粘土が少い地方では壁には自然石を用ひ、屋根は竹で葺く、一棟一家族のものが多い。しかし同族は集合し大家族主義的生活を営む。食物、衣服はジヤハア人と大差ない、女子は上半身裸で、乳房を露出して居る。

ロムボツク島スムバワ島には六五万の人口を有するサヽク族が住する。サヽク族はかつてマタラム王國を樹立したが今は衰へて居る。バリー族に引きかへ回教の信仰が厚い。

二、フイリツピン人

フイリツピンの先住民族はネグリトー族であり、マレーの一族イゴロト族が北上し、先住民族なるネグリトー族を圧迫し、平野地方を占居したのである。その後タガログ族及びマレー人の移住と共にイゴロトも山中に移住するを余儀なくせしめられた。又ボルネオのモロ族も一時はルソン島に迄その勢力を及ぼしたがスペイン人のその地に領有するに及びこれ又その

地を譲らなければならなかった。上述の如くフイリツピンには多種なる民族の混在を見るのである。以下に於ては各種族の信奉する宗教を基準として次の如く三大別する。即ちキリスト教徒たるフイリツピン人回教徒たるモロ族等、民族宗教を保有するイゴロト族等の三群これである。

フイリツピン人はルソン島南部よりピサヤ諸島に亘り多く分布するものであつて、フイリツピン群島に於ける全人口の約九割を占め、その包含する種族を列挙すれば、タガログ、ヴイサヤ、ビコル、パンパンガ、カンバルパンガシナン、イロカノ、カヾヤン等の諸族である。その分布地域並に人口数を示せば次の如くである。タガロク族、ルソン島の中部諸州、人口約三二〇万、ヴイサヤ族、ヴイサヤ諸島、人口約四九〇万、イロカノ族、ルソン島北西岸、人口約一二〇万、パンパンガ族、タガロク族の北西部、人口約三四万、パンガシナン族、ルソン島中部平野の北部、人口約四二万、カヾヤン族、ルソン島北部カヾヤン河流域、人口約一五万、カンバル族、ルソン島カンバリラ州、人口約六万、ビコル族、ルソン島東南部、人口約

八三万　バタン族　ルソン島北端　バタン諸島、人口約六千　人種系統は原馬來族乃至開化馬來族であるが　多分に白人の血を混へて居る。身長は中位にして、皮膚は黄褐色　短頭　広鼻、目は蒙古眼であり　頭髪は直状にして黒色である。

フイリッピン人の性格にはかつてはスペインの、現在はアメリカの領有の下にあり、被征服民たる立場にある事が影響し明朗性を欠き、臆病にして嫉妬深いと言ふ甚だ消極的な面を多分に有してゐる。又その爲に、社交性に長じ　小才の働くものが多い。イルカノ、パンパンガ、パンガシナン等の諸族には勤勉、勇敢にして活動的なものを、又カバヤン族には怠惰、鈍重のものを見るが概しては上述の如くである。

長くスペイン、アメリカの領土となつて居るフイリッピンには欧米文化の侵潤著しく　本來の文化、社會組織を失つて居る　一九四六年の独立を前にし、ひたすら民族的自覚を強調し経済の轉換を計り　自主的経済　文化の確立に邁進してゐるが、アメリカの東洋に有する原料供給地　市場としてアメリカの経済的の支配は極めて大である。

豊富な資源に恵まれてゐる原料生産國たるフイリツピンに於ては氣温、雨量、地味ともに農耕に適しその住民の主要な生業は勿論農業である。その産物の主なるものは米、甘庶、麻、煙草等があり家畜として水牛、牛豚を飼育す。フイリツピンの農業も亦、土地利用即ち耕作規模が分散的であるのに對して土地所有はかなり高度に集中され少くとも総耕地面積の四五%は大地主によつて所有されて居るのである。この零細性は生産力を極めて低位に止めおくと共に地主の支配力の強化に役立つて居る。大農場経営も行はれるがこれ亦實質的には分益小作人によつて耕作されて居るものが多いのである。

漁業は土人の幼稚な漁撈法によるのであるが、本地方の漁業に於て最も活躍して居るものは日本人であることは種々の方面より注目されて居る。

工業は家内工業の域を脱してゐない。製糖、製麻が近代的工場を有する位でそれ以外の多くは家内工業に依存するが概して製造工業は盛とは稱し難い。生産物としては、砂糖、麻、椰子油、洋灰、煙草、コーヒー等が挙

げられる。

何れにせよ原料生産國たる段階にあるフイリツピンはその独立を目途に控へて居るが　アメリカの市場に依存しつゝアメリカの資本によりて育められて來た住民の文化　経済生活は　アメリカよりの實質的独立は困難にして、又實質的独立はフイリツピンの経済的危機を惹起するものとして独立より更に十ケ年の間猶アメリカ資本の下に置かれることゝなつて居る。

生活様式は文化の程度に應じ　歐米人に匹敵するものより蕃族に近きもの迄存する。女尊男卑の風も行はれ　婦人の社會　家庭に於ける地位は他の東洋の諸民族の間に見るよりも着しく高いのもその着しき例の一つである。婦人の服裝にて特長ある点は下はスカートであるが上衣に薄いものを羽織る事である。住居　食事等に於ても文明國々民と変らぬものより山中に自足に近き生活を営むもの迄存する。

長く、スペイン　アメリカの支配下にあり、その教化を受けし事の大なる事は前述の如くであるが宗教に於てもキリスト教就中カソリック教を信

奉するに至つた。

言語は、方言が極めて多く八〇余種に上るとさへ称せられて居るが、何れもマラヨ、ポリネシア語の系統に属する。主なものは、ダガログ語、イルカノ語、ビコル語等である。フイリツピン人の民族的自覚の昂まつて来た事はフイリツピン人の國語問題に於て、從来公用語とせられた英語、スペイン語を廃止し土語たるタガログ語を以てそれに充てんとするが如き事に於てもその一端を知り得るのである。

二二、モロ族

モロ族は主としてミンダナオ島に居住し、スールー群島、パラワン島にも分布する、更に分ければミンダナオ島の南岸に住するイラヌン族、サンギル族、ラナオ族、マギンダナオ族、スールー群島東端のバシラン島のサコル族等の種類に分け得る。

一八三〇年頃、スールー列島を経てミンダナオ島に移住せし回教徒の群

に改宗するに至つたものであつて、現在キリスト教徒たるフイリツピン人の圧迫を蒙つて居るが猶相当の勢力を有して居る。現在の人口数は約五十二万と推定せられて居る。人種的にはフイリツピン人と相異はないが、やゝ異る点を挙げれば、頭のより長い点と、鼻のやゝ廣かつて居る等である。性質はフイリツピン人と著しく異なり、標悍にして、惨忍性を有する。モロ族が同化し難い事は、スペイン或はアメリカの統治の下に於て度々の反乱をなせし事によりても知り得る。スールー群島のものは特に反抗心強く現在なほ一勢力たるを失はない。

モロ族の社会組織は奥地蕃族に比せば進歩して居るがなほ低度のものである。酋長を中心として社会単位を形作つて居るものもある。

然し学校教育を利用することによつて進められるモロ族同化の政策の為に困難ではあるが次第にその社会組織も解体しつゝある。

多くは次項で述べると同様に原始的な農業を営み、一部のものは漁業に従事し、海上に起居するものもある。住居は海辺にあり、水上家屋を建て居

住する。衣食住の生活様式に関しては後述のイゴロット族に類似するが故にここには省略することゝする。

三、イゴロット族

イゴロット族とは、ルソン島の奥地に住する蕃族であつて、北部の地形急峻な地方にて、独自の民族宗教を固執して居るもの、総称である。その数は四〇万以上であると云はれ、種族別に主なものを挙げれば約一〇万のイゴロット族、約十四万のイフガオ族、約七万のアリガン族があり、何れもプロトマレーの系統である。

身長低く皮膚は褐色、頭髪は黒色である。性格は勇敢にして温順である。かつては首狩の風習を有してゐたが、現在は行はれてゐない。

生業の主たるものは農耕であるが、その方法は原始的な焼畑農法によるものにして、米、甘藷、玉蜀黍、粟、豆類、タロ芋等を栽培、これを食するのである。奥地に住するものは米は多く陸稲を作り、イゴロット、イフガ

さ、アリガン族等にては水稲を栽培するものもある。時には野獸、川魚を捕へて食す。家屋は高い支柱の上に、木又は竹を用ひて建て草で葺いたものが多い。時には樹上に設けられたものもある。直接地上に建てられた家屋はイゴロット族のもの以外には見られない。衣服と称するものを着するものなく殆ど半裸体の生活をなして居るものが多い。一夫多妻主義が行はれて居るが漸次廃止されつゝある。

第四章　印度の民族

印度は廣大なる菱形の大陸で、面積は一五〇平方哩以上と計算されてゐる。北面は世界最高の山嶽に境界づけられて居り、其所では極地域に於ける程、寒冷である。印度洋に面せる南部は温度、濕度共に高く、更に北西部の沙漠地帶は高温である。印度大陸は斯くの如く、極寒と極暑、乾燥と高濕との間の多様性を持つた風土條件を備へてゐる。此の様な地理的特徴から、印度に於ける住民は廣範且異質的な風土條件に曝されてゐる。

印度に於ける地理的環境から受ける影響は極めて適当に研究され得るし、又現在に於ても調査研究の領域を打横ぢてゐる。

衆知の如く印度社会に於けるカースト制度は種族の理解に関しても可成り重要な要因となつてゐる部分もあるので、必要なる限りに於て概観しよう。一般にカースト制度に関する社会学的研究は極めて複雑なる問題を構成してゐるが、其れは一般に同族結婚集団として定義されるかも知れない。而して此の規準には殆んど例外は存しない様である。マラバールに於ける

ナムブドリとネイルの少女の関係は現実的には結婚関係ではなくて、一層適切に言ふならば、上位の身分と結合された古い直系卑属的條件の残滓である。ナムブドリは一種のマナーの君主である。ネーアの少女から産れた子供はナムブドリに属するのではなくて、ネーアの少女に属するのである。之はカースト制に於ける重要点である。之は我々から見るならば殆んど結婚としては考へられないのであるが、彼等に於ては、高い階級の男と低い階級の女との間に出来た同棲関係は恒に斯るものとして考へられて居り、例外は殆んど無いと言つてよい。尤もゼミンダア階級の間には此の一般的基準に對する奇妙な例外があるやうだが、別に此の通例の関係を是認するのに障害となる様な根據となるものではないとされてゐる。兎も角、カースト制度は一連の同族結婚集団として考へてよいのであるが、それだからと云つて、之が全然他の種族の流れを阻止する様な形に機能してゐるのでない事は前述の事情が示してゐる通りである。

一見すれば、カーストは本質的には社会を水平的に分割する一手段のや

うに思はれるけれども、其の範囲はより廣範に渉つて居り、所謂垂直的分割も存してゐる。カーストの分類は今迄も各学者によつて提示されてゐる所であるが、リズレーによつて與へられたものが、実際的目的の爲には好適なるものと思はれる。彼によれば、

イ、種族的カースト型
ロ、職業的カースト型
ハ、宗派的カースト型
ニ、混交的カースト型
ホ、國民的カースト型

の五つを挙げてゐるが、此の中、比較的重要なるものとして、宗派的カーストが挙げられるかも知れない。種族的カーストは云ふまでもなく自然的傾向によつて、種族がカーストとなる。スードラ族は元来、初期住民の全体を現してゐたものと思はれるが、今日、我々はチヨタ、ナグプールの種族、オリワサのコンド族、ナガ族の中にこの適例を見ることが出来よう。更に北西辺

境地帶の種族も一つのカストになるやうな傾向を持つてゐるやうである。

職業的宗教的カーストは別に申す迄もないが、この中職業的カーストはヨーロッパ人にとつては歴史上馴染深いものと思はれる。

カーストは本来の「色彩」と云ふ意味を持つてゐた様で、この事から最も初期のカーストが何よりも種族型か國民型、或ひは移民型であつたものとすることは別に不合理な想像ではないであらう。之等の型に於ける混交がなかつたとするならば、比較的純粋な型の傳承が行はれたものと考へられる若干の根據がある。今日ですら、或るカーストの間では肉体的差異を持つて居り、更に同一カーストに屬する成員間に著しい差違が認められるのはこの辺の事情に対する暗示を與へてゐるもの、如くである。ブラーマン、ジャート等は即ち此の例である。

以上は別に決定的な人種学的標準を與へなくとも、カーストが広大なる印度半島に於ける複雑なる人種を區別するに便利な役割を演じてゐる事を述べたまでである。

デニカー（J. Deniker）の分類は不充分なものであるが、彼は次の如く云ってみる。

「此の国に発見される型の多様性は、二つの土着人種の交流によるものである。印度アフガン族とナラノ、イラデイアン族、北部に於ては、トルコ族とモンゴール族、東部に於てはインドネシア族、西部ではアラブ族とアワシロイド族、中央部では恐らくはネグリトイド族が即ち之である。身長の高いインドアフガン族は淡褐色と黄褐色との複合であり、長い顔、波打つた毛髪、際立つた細い鼻、長頭を持つて居り、印度の北西部に優勢である。メラノインデイア族又はドラビダ族は長頭、短身、暗褐色と黒色との複合物、波状縮毛、主として印度南部に見出される。之は更に分れて二つとなる。

(1) 廣鼻型種族

廣く平たい鼻をして居り、顔は尤く、西ベンガル・オードホ、オリッサ等の山嶽地帯に見出される。

(四) 狭鼻型種族

狭い鼻、まのびた顔をしてゐる。ネアイアテルグ、タミールの諸地方に見出される。

インドアリアン体型と呼ばれたものがある。此所でアリアンなる語の正確なる意味がどのやうなものであるかを穿鑿する事は不可能である。言語学的立場からヘアリアン語を想像させようせも、別に所謂、アリアン的な肉体型を持ってゐるのではないのである。言語上の證據を見れば、アリアン文化の移入の跡が見られるが、言語的証據と文化的証據とを相関付けることは、何か困難なやうにも考へられる。

セイロン島の住民は南部印度の住民と緊密なる関係を持ってゐる。人類学的研究にとって最も興味あるものはヴエッダ族である。其の肉体型は現在、数量に於て限定されてゐる。身長は極めて低く、平均身長約一五〇糎である。皮膚は暗褐色であり、ともすれば黒色に近い。頭蓋は通常極めて小さく長く狭い。毛髪は粗く且波型を呈してゐる。眉際は特に男性に於て

よく発達してゐる。身体には羽毛がかなり生えて居り、特に頤には際立つてゐる。この種族の肉体の構造(ツクリ)は纎弱に出来て居る。鼻は通常極めて広い。此の種族型はセイロン島に於ける他の種族とは全く異つてゐる。之は印度本島に於ける前ドラビダ体型と関聯あるものと思はれる。之と相併んでセイロン島には明かに南部印度のドラビダ族と関係を持つた種族がある。身長高く長頭型皮膚の色は他の種族とは対照的な明色を呈してゐる。

セイロン島は、云はゞ南アジアの正に道路の終端である。それ故こゝには各時期に印度に流れ込んだ大低の人種の混淆があつたものと考へる事が出来よう。

印度に於ける諸人種の考察は概略上述の通りである。印度が地理的にも人種的にも多様性を持つて居る事、各種族が西方から、北方から入り乱れて這入つて来た事従つて我々が印度民族と云ふ語の下に考へる程の人種的統一がない事、而も此の人種的差違は大体、社会制度としてはカーストと

なって現れてみる事等が知られるのである。此の最後に述べたカースト制度は社会的分列の状態を一層深めて行く契機となってみたし、国民的統一への歴史的社会的自主的地盤は印度に於ては最も稀弱なるものとして残置された儘になってみたのである。

有職業別人口 1931年（世界大一）

職業別	人口（単位 1,000）	指数
農業及牧畜	102,454	78.97 %
漁業及狩猟	1,308	1.01
鉱山、採石、製塩業	346	0.26
工業	15,361	11.84
運輸通信業	2,341	1.80
商業	7,913	6.07
計	129,728	100.00

印度人の職業別人口を一九三一年の調査により概観すれば、其の殆んど八割までが農業に携って居り、工業がこれに次いで一一・八四%商業人口は六・〇九%で其の他の部門は殆んど云ふに足りない比重しか持って居らない。此の農業人口の圧倒的な比重こそ印度の経済機構の持つ独特の性格なのであって、英国の土着労働政策の巧緻な絡繰が潜んでみるのである。従って此のことに附合する興味ある統計が附表第二である。

同じく一九三一年の調査であつて、第一表では有職業別人口の調査であるが、第二表では全人口三億五千万中、農村地帯に住居する人口が如何に圧倒的であるかを物語るに余りあるものである。

附表第二

都市人口（1931年2月24日）

大小別	都市数或ハ農村数	人口	全人口ニ対スル%
10万以上ノ都市 —	38	9,674,032	3.7
10万以下5万以上ノ都市 —	65	4,572,113	1.3
5万以下2万以上ノ都市 —	268	8,091,288	2.3
2万以下1万以上ノ都市 —	543	7,449,402	2.1
1万以上5千以上ノ都市 —	987	6,992,832	2.0
5千以下ノ都市 —	674	2,205,760	0.6
以上都市人口 —	2,575	38,985,427	11.0
農村人口	696,831	313,852,351	89.0
全人口	699,406	352,837,778	100.0

印度の民衆が貧困と無智とに曝され、英帝国主義下に呻吟してゐるのも不思議はないのである。最近印度工業の急速なる発展は必ずや農林労力機構の上に大なる変動を引起してゐるものと想像されるが、印度に於ける急激なる労力機構の変動は単に経済機構内部の問題として止まらず、其の他の

領域に於て推積されてみた矛盾を白日の下に持ち来らす契機をなすものと考へられるのである。

第五章　北方共榮圏の民族

一、シベリヤの民族

シベリアは北部アジアに廣大なる面積を占めて居り、殆んど全大陸の約四分の一の領域を構成してゐる。此所ではツラニア及びウラルからベーリング海峡に渉つて擴れる大シベリア平原と云ふ名で知られてゐる地域を問題にしよう。其れは三角形を成して居り、其の頂点はオビ河口の近くに位置し、一つの角アラル海に、他角はベーリング海の近くに夫々位置してゐる。北面は北氷洋、西はウラル山脈、南は大山脈の連りによつて境界付けられ此の南部の山脈地帯に、オビ、エニセイ、レナ河の源が発してゐる。之等の境界に近付く事は地理的制約を持つてゐるので極めて困難である。

南方に於る支那との境界をなしてゐるのは高い山脈であり、又沙漠である。北部では北氷洋が越え難き障壁を為してゐる。東部では山脈と世界で最も荒れ狂ふ海洋と此の地域とを絶縁してゐる。

ただ西部にあつての み、其の境界は定けてゐる。山はあつても地圖に見る程峻しくはなく通行容易であり、航行可能なる河が密接に接続してゐる。移動人種が通つて来たルートは此所だと考へられる。殊に南部の草原地帶を経由したものゝ如くである。

先づ便宜的に二つの部分に別けられるであらう。第一の部分はエニセイ河からウラル山脈にかけての西部シベリアであり、第二のものは東部シベリアである。前者は一般に第三紀層であり、南部は山脈によつて区切られてゐる。後者は地理學的には前者より一層古いものである。地表は丘陵地帶に於るものと異つて居り、東の涯に於ては高山脈が境界をなしてゐる。此の断続的な地表は東部シベリヤに接近する事を困難ならしめてゐる。然し乍ら地理的困難にも拘らず、此の東の涯とアメリカ大陸との間に緊密なる交渉が時々存在したと云ふ所説を保証すべき充分な証據が存するのである。

全体として考察するならば、地域は極めて廣大である。巍然たる山嶽地

帯によつて南部から遮断されてゐるけれども、北部からは気候の影響を受けてゐる。それ故、シベリアは冷い大陸的気候に曝されて居り。或る部分を除いて、下層土は極に凍つてゐる。

極く一部分が真に北極的気候であり、甫余の地域は亜北極である。北極地帯はトボルスク及びエニセイスク州の所管する地帯である。亜北極地帯は種々の地域に分割される。先づ第一には、トボルスクの南部、エセイスク州及びトムスクの大部分。第二には最も廣い意味に於てキルグイツ草原地帯及びトランスバイカリア、イルクツク地帯を包めたシベリアの南東部。最後に、我々は他と異つた気候区域として沿岸地域を考察しやうと思ふ。

北極地域は種々の條件が併存してゐて、別に一致した特徴ともはない。世界中で最も極端な熱と冷たさとが其所に於て感ぜられる。夏は冬よりも暖つてゐるけれども、全体として見て気候は極端な乾燥状態を呈してゐる。温暖なる季節は極めて短く、此の短い時期にあつてすら、気温は低い。夏

には一日中明るいが、冬には一日中光がなく、而も極端な寒さと乾燥した風に曝されてゐる。最も寒冷なる所は現実の北極沿岸にあるのではなくて、中部エナ河地帶にある。亜北極地帶の中、第一のものは、屢々極寒を示す程極めて嚴しい気候の特徴を持つてゐる。アルタイ山脈では、一般に嚴しい気候であるが、高い山脈によつて北から遮られたある狹谷では温暖な気候を持つてゐる。第二の地帶では、平均温度約三五度（華氏）であり、明かに温暖である。殆んど雨雪なく、夏に於てすら降雨は極めて稀である。第三に南東シベリヤでは、寒い季節が長く、寒い季節から暖い季節への移り目は極めて急速である。第四の地帶は極めて寒冷であり、カムチヤツカでは極めて濕度高い。

北極は凍土地帶である。南部亜北極地帶は草原（ステップ）とアルプス州を包んで居り、屢々水に潤澤な肥沃な狹谷を成してゐる。

シベリアに関する旧石器學的解明は、特にエニセイ地帶に関して、可成り爲されて来たが、現在此の地帶の初期人種史では大部分のものが手を加

へらぬ儘になつてゐる。リンセウツテ（Talko-Hryncewicz）はトランスバイカリアに於るオウスト、キアカタから数多くの初期の頭蓋骨を吟味した。其等の頭蓋骨はセランガ河の支流たるサガ河左岸で発見されたものである。彼の結論によれば、之等の頭蓋骨はモンゴロプリアト族の近代型と異つて居り南部ロシアのクルグ族に近似せるものである。何かと同様な証據がゴロンチエンコによつて齎されたけれども彼の証據資料の存在せし時期は青銅時代と考へられるものである。

其の材料は分れてマスクと頭蓋とり二つに分れてゐる。此のマスクは総ゆる藝術作品にふれてゐるので科學的論議を営む場合に之が本当のものだと主張し得る弱みがあるけれども、其の中の或るものはデスマスクであつたやうに思はれるから、さうなれば價値のある証據物件を提供してゐることになる。マスクは二つの型に属してゐる。即ち所謂、タガラとチヤータスであつて、チヤータスはタガラから発展したものゝ如くである。タガラはヨーロッパ型を示して居り、チヤータスは蒙古型を示してゐる。だが二つとも

青銅時代のものであるから、時代的には異つてゐない樣に思はれる。

頭蓋測定はまだ一つの均一型を示してゐる。尤も豫期せらるゝ如くクルグの二種族とは異つた平均側定値を持つてゐるけれども。チャータスから得た頭蓋骨はタガラから得たものよりはより長く而も著しく高い。だが或る學者が信じ勝ちな根本的な人種的差違を認むべき充分な証據は別に存する訳ではない。之等のものはシベリアのクルガン族から知られてゐる所の他の青銅器時代に屬する頭蓋や、モスコー地区から出た頭蓋と極めて緊密な一致を示してゐるのである。九十六の頭蓋骨の中、四十二は長頭であつた。頭蓋形態から判断するならば同一地域に住居せる現在の住民のものと異つてゐるばかりでなく原始北方型のものに率ゐ屬してゐるもの、如くである。

之等の古代種族と其の近代的相続者との間に横はる溝は未だうめられて居らない。アジアに於ては継続的な人種移動があつたのであつて著しい変動が比較的最近に於てさへ示されて居たのである。デニカーによつて提案

された近代住民の分類は二集団を含んでゐる。第一の集団はサモイド族及東フン族と何等かの親近性を持つた西部シベリアの種族を包含してゐる。デニカーは之等のものをエニセイ族（Jeneiseians）又はトラバ族（Tribas）と呼んでゐる。第二の集団は此の大陸の極東北地区に於る住民から構成されて居り、之をデニカーはシレンク（L. von Schrenk）に従つて、Palaeo-asiatics と呼んでゐる。

第一の集団の中には彼はアジアのサモイド族及び二つの顕著なる集団たるエニセイ河のススチヤーク族、支那史のトウポウ族を含ませ之をヤルタイ族と呼んでゐる。更に一層南方の住民を彼はトルコ人種及びモンゴール人種として集団化してゐる。

モンゴール族を彼はヨーロッパの或る人種と肉体的には同一のものとしてゐるけれども決して同質的なものではない事は認めてゐる。トルコ人種を以つて前者よりは一層肉体的に同質性あるものと彼は考へてゐるが、両者をモンゴロイドと呼ぶより外は相互の関係に関する意見を表明して居らな

いやうである。

ツアプリカはデニカーの分類の基礎の上に立つた分類を更に試みた。彼は Palaeasiatics と云ふ通常使用される意味の言葉を無意味なるものとして、Paleo-Siberians と Neo-Siberians との二つの主要群に分けた。パラエオシベリア系の中には次の如きものが含められてゐる。

① チュクチイ族　アナダアル河と北極洋との間の北東シベリアに居住してゐる。

② コリヤアク族　アナダアル河とカムチヤツカ半島の中央部との間のチヤクチイの南部に居住してゐる。

③ カムチヤダル族　カムチヤツカ半島の南部に居住してゐる。

④ アイヌ族

⑤ ギリヤーク族

⑥ エスキモー族　ベーリング海峡のアジア側に居住してゐる。

此の他、此の章に限界さるべき地理区別外のものとしてアリユーシヤン群

島に居住せるアリユト族がある。ツアプリカはユカギイル族が低ヤナ河と低コリマ河との間に住んでゐると述べてゐる。だが之等のものは絶滅したとボゴラス（Bogoras）によつて主張されてゐる。チユヴアンツイ族はアナダアル河の上流及び中流に居住して居り、エニセイ河のオスチヤク族は低ツングスカとストニイツングスカとの間の低エニセイ河に居住してゐる。之等の種族と他のものとの間の差違と云へば極く微少なものであるけれども、一応之等の分類を弄して置く事は極北地区の種族を理解するのに便宜なるものと考へられる。

次に新シベリア系種族はそれよりも一層細分された集団を形成してゐる。

① フン種族（Finnic tribes）

ツアプリカが二つの集団に別けたものであつて其の一つはウグリアオスチヤアク族であり、他はヴオグール族である。

② サモエデ種族（Samoyedic tribes）

之等の中に含まれるものは極北地区に居住するもので、カタンガ河口

からウラル山脈に渉る地域を占めてゐる。

③トルコ種族（Turkish tribes）

肉体的観点から見る場合は何か不合理のやうに思はれるけれども、人種学的観点から見れば極めて便利な分類である。

之は別れてツラニア族とシベリア族との二族となる。此所ではシベリア族のみが関心の対象となる。だがツラニアトルコ族の或るものは時代を異にする度に其の地域を変へて居るのである。

此の中最もよく知られたものはキルギイツ族であらう。中央アジアの数多くの種族と同様、大多数の之等種族の特徴とする所は実に短頭たるにある。而してブリアート族の間の短頭的要素と同様なる集団に彼等が属してゐるものゝ如く思はれる。

イヴアンスキーによって報知された之等キルギイツ族の一集団は、平均頭形指数（Mean Cephalic Index）八九、四を有してゐる。総て之等の種族中頭幅は極常値を示してゐるが、頭長は可成りの変動値を示してゐ

ることが述べられてゐる。之がパレオエ人種と区別さるべき点であらう。

キルギイツ族集団と極めて大なる対照をなすものは東方トルコ族である。之の中にはヤクウト族、カヂンタタール族、バスキル族、ソヨテ族及其類縁族が含まれてゐる、之等の種族は何か低身長のもの丶様であり、殊にヤクート族に於てこの事が言へる。だが身長に於る之等の差違はキルギイツ族集団と区別するに充分なる徴標ではない。だが頭形指数は本質的に異つてゐる。之等の種族は其の点で一致して居り、八二から八三の値を持つてゐる。総ての観察者は此の点では意見の一致を見てゐる。其れ故、我々は其れを以つて信ずべき特徴と考へて宜しいやうに思はれる。頭長はキルギイツ族よりは長いが、頭幅は二〇ミリメータ短いやうである。

之等種族の人種的類縁関係は何か漠然たるものがある。最近になつて彼等がモンゴールと数多く混淆する様になつた事は明瞭であるが、

大低のものは肉体的にモンゴールと多方面に於て異つてゐる。彼等は大部分アルプス人とパレアシア人との混淆種族なるものゝやうであるが、彼等の血管の中には其の他の血もまた恐らくは流れてゐるであらう。

其れ故、オスマントルコ族及びイラニアトルコ族の場合に於ると同様、トルコ人種に付いて語る事は不可能であるが、種々のトルコ体型は（ジェベル）其の地理的環境と歴史を異にするに従つて肉体的に異つてゐることが知られるであらう。

文化的にも肉体的にも之等トルコ種族と関係あるものとしてシベリアのモンゴール種族がある。其等のものはトルコ＝モンゴールと云ふ名の下にトルコ族に屡々入れられてゐる。シベリアに於るモンゴール種族の唯一の代表者は最密に文化的意味に於ては、バイカル湖畔のカルカ族である。

④ツングース族（Tungusic tribes）

最後にツングース種族として記述さるべき極めて重要な種族集団がある。本来のツングース族は東経六〇度から太平洋にかけて、及び北極から支那辺疆にかけて見出される。混淆の度合を異にした他のツングース系種族は数多く存在してゐる。

満洲族は之に属するが此所では除外する。此所でツングース系種族に属するものとしては、チヤポギ族、（Chapogi）ゴルヂ族、（Goldi）ラムート族、（Lamut）マンヤーグ族、（Manyarg）オロチ族、（Orochi）オロチヨン族、（Orochon）オロック族、（Orokke）ソロン族、（Solon）等が挙げられる。

パレアシア系種族に関しては可成りの資料が之迄集められて来た。生憎其の貴重なる資料は現在、生物的人類学にふれる内容を有する事誠に少いのであつて、我々は唯、ヨチエルソン＝ボロゾドスカイ夫人の筆によつて物された短かくはあるが香り高い論作を有してゐるに過ぎない譯である。

彼女が蒐集した特徴ではパレアシア系統は決して等質的集団ではない事が示されてゐる。最も顕著な特徴は身長の低いことである。確かに此の低身長は彼等に具備されてゐる本質特質と云ふよりは寧ろ彼等の属してゐる環境の極端なはげしさに基く結果であらう。チヤクチー族、コリヤーク族、アジア的エスキーモ族、其れよりは低度のカムチヤダル族等は極端に低身長の種族ではない。頭形指数（セファリックインデックス）は約八〇である。コリヤーク族、カムチヤダル族及びオスチヤーク族は一層長頭であり、或る観察者はギリヤーク族が極端に短頭型である事を提案してゐる。ボロツドスカイ夫人によつて引かれた特徴は八六以上の値を示してゐる。其の他の頭形指数が互ひに比較される場合、其の差は決して之程著しくはないのである。然し乍ら其等のもめ、間の相違は充分本質的なものであり、地方的差違が存するのである。

一般に之等の種族は極めて異質的なものである事が之等提案されて来た。一見すれば之は自然な説明を考へられよう。然し乍ら標準偏差の示す所から判断すれば彼等は少く共著しく純粋な型に属さゝるものゝ如くである。

例へばコリヤーク族の頭形指数の標準偏差は三以下であり、其の種族が著しく同質的たる事を暗示する充分なる徴標と考へられるのである。チヤクチー族になると一層この関係は著しい。それ故彼等の起源が如何なるものにまれ、之等の種族が少くとも著しい人種統一度に達して居つたとする事は可能であると思はれる。

シロコゴロフ（S. Shirokogoroff）は彼の所謂第一回人種移動時代（紀元前約四万年頃）に之等の種族はゴビの北及び東の全地域に位置を占めてゐたが、ツングース系種族の圧迫により其れより二千年後には其の地帯から追出されてしまつた、と説いてゐる。其の根元に於ては彼等は原始北方系と黄色系に近い種族系との混淆であつたやうに思はれる。アイヌ族は認らく黄色系との混淆度より少きものと思はれる。

之等の種族は亜細亜と亜米利加大陸の間を環流してゐたものと思はれる。多くの特徴の中、特に黄色人の代表的なもの、中に見出されるものよりは一層極立つて発達した頬骨はアメリンド系を聯想させる。だがアメリンド

系は屢々身長、頭蓋形態の点で彼等と異つてゐる。早期に於て、此の黄色系とパレオ工系とを分離した現代のトルコ語及蒙古語を話す種族と共に或ひは其れに先立つて、西方からの種族侵入運動があつたものと考へられる。

偖、次に興味ある詳細な点を少しく考察して見よう。アメリカ及びグリーンランドのエスキモー族は特殊な人種であると云ふ理由によつて、或は彼等の服する異常な自然條件に特殊化されてゐると云ふ理由によつて人類学者の間に可成りの注目を引いてゐるものである。之等の諸特徴の中の一つは長頭たることである。アジアのエスキモ族は丸い頭をしてゐると云ふ点でグリーンランドのものと異り、一般にはパレアシア型に一致してゐるものである。両者間に関係があるとかないとかを穿鑿し得る程此の種族についての研究は未だ充分為されて居らない。ただアジアのエスキモ族は極めて狭い鼻をしてゐると云ふ事は興味深い。

パレオ＝シベリア種族は北アジア大陸に生存する最も古い層であるようだ。彼等は或る程度異つてゐるけれど、さう大した程度に相異してゐるも

のではない。彼等は極めて往昔の時期に於て、原始北方系と初期の黄色人との混淆と思はれるが、現在の所ではそれも正確には判らない。果して然りとすれば可成り古い事に属するに相違なからう。

新シベリア種族は最近になつて人類学者によつて相当の関心を持たれたものである。ルーデンコ（S. Roudenko）は其の西方種族の現在分布を奥へてゐる。サモエド族は現在欧ロシアの北東地帯及びオビ、エニセイ両盆地の最北部に見出され、トムスク及トボルスク州のオスチヤーク族は河境に沿つて見出される。ヴオグール族はサスヴア、シグヴア両河盆地及びトレンスク、トボルスク、の北西地区、パルムに発見される。サモエド族は二%のブロンドで眼は明るい。其の他のものはえよりブロンドの度合が少い。身長は総て一五七糎。サモエド型はオスチヤーク型より著しく高くボグル型よりは幾分高い。筋肉は充分よく発達して居る。短頭で、顔は長く廣い。頬骨は出てゐる。前額は相対的に狭く、鼻は中間型である。歯槽頻（alveolar prognathism）は可成り突出てゐる。眼及び毛髪の色は一般に

暗色を呈してゐる。

ヴオグール族はサモエド族より座高高いが両者の身長は同じてある。彼等は共に長頭に近い。彼等の顔は小さく、頬骨は発達して居らない。前額は廣く、鼻は殆んど平たいと云つて良い。

オスチヤク族は中間型を代表してゐる。彼等は想らくヴオグール族と同一人種に属してゐるようである。

若しサモエド族が他のアルタイ系種族たるコイバル族等と比較される場合肉体型の差違は直ちに明瞭である。同一型に属する唯一の種族はウリアンカイ族であつて、之はゴロシチエンコによつて既に吟味された所である。両方共同様な色であり頭蓋形態、長顔等同様である。

之等興味ある種族の起源及び関係は不明確である。彼等は全体として見ればパレオシベリア系と異るばかりでなく、恐らく其の他のものとも相当の差違がある。例へばオスチヤクと言ふ語は唯にオビ、エニセイのオスチヤーク族を包むのみならず、又他の集団をも含んでゐる。

ルーデンコはサモエド族とラップ族との間には関係があること、アルタイ地区から西方に向つての移入民があつた事、南方からの移動種族によつて西部集団と東部集団とが分割された事等を提案してゐる。

特別なる論鑿を必要とする若干の特徴がある。先づ第一に、之等の種族は北方種族と同様に身長が極めて低いことである。之は環境に基くものと忘はれる。第二に彼等通常、黄色人の或るもの結び付けらるべき特徴を持つてゐる。通常頭は丸型であり、必ずしも黄色人と高度に関聯あるものとは限らない。彼等は亦、長頭であつてブロンド色を交へてゐる。更に彼等の血液に於る一つの重要なる傾向はルーデンコが提案せる如きアルタイ地区からの移住に基いてゐるらしい。ボグール族の如き種族の中にあつて、其の頭蓋形態及色彩の差違は北方型又は原始北方型との混淆に基いてゐる事を暗示すべき理由がある。如何なる場合よれ、之等欧亜型は可成りの人種的混淆の結果たるもの思はれる。

二、ツングース族、満洲ツングース族

新シベリア種族は必ずしも人種的に結びついてゐなくとも通常同一集団を形成してゐる所の同一文化的類縁関係に立つた他種族を論ずるに際して、所謂トルコ族は一層便宜的に取扱はれる種族であるかも知れない。

偖、それから通古斯系種族が最後に残つてゐる。純粋なる通古斯族の肉体的特徴はツアプリヤによつて記述されてゐる。彼等はサモエド族程低くはないけれども、平均以下の身長であると彼女は云つてゐる。此の記述は通古斯がモンゴール（一六三糎）と同一身長であると報告する。其の他の観察者の述作と全く一致して居らない。頭は総ての観察者が一致して云ふ如く著しく長い。頭長（Head length）は低頭（Low head）たるモンゴール族との混淆によつて影響される場合を除いて、通常相対的に高い。頭幅はまた通常大きいから、通古斯族は大頭蓋を持つてゐる訳である。ツアプリヤによれば顔は長く鼻は狭い。彼等は南方支那人及び或る日本人に最も近くモンゴールとは似てゐないと結論してゐる。

シロゴロフ（Shirokagoroff）は挙う其れとは異つた見解を持つてゐる

ようである。ツングース族中の基本型はバルグヅインの通古斯族中に発見されると彼は云ひ其の特徴を挙げてゐる。

(一)極めて低身長である事、

(二)低頭形指数（low cephalic index）を有してゐること。七七。

(三)低鼻形指数（low nasal index）を有すること七七。この点では全ての観察者の意見は一致してゐる。

彼はまた之等の種族の前額指数（frontal index）の低い事に関心を持つてゐる。彼は此の型が支那人中の単なる附隨種族に過ぎないものと信じ、通古斯族が人類學的観点から見て同質的種族に非ずと云ふ難局を切抜ける最終の途であるとしてゐる。純粋通古斯族の型の規定はそれ故、最近までモンゴール族と混淆しなかつた集團か、或ひは他の種族か観察者の眼にとまるかどうかに依存してゐると云つてよからう。

シロコゴロフは通古斯族の起源及最近の移動に光を投ずべき興味ある文化的資料の数々を蒐集して居る。彼の提案せる所によると彼等通古斯は早

期に於ては温暖なる地方に居住して居つたが（恐らくは支那大平野）現代居住せる住民の継続的移住によつて押出されたものゝ如くである。初期基督教時代に彼等はトルコ族の起源たるヤクート族の侵入によつて二分されたと彼は考へてゐる。斯る説は通古斯族が南方支那人に最も近似せるものとするツアプリカの提案を否定してゐる事とならう。

通古斯族の現実の人種的位置は之等の移動に関する提案によつてより簡明化されてゐる訳ではない。彼等は明かに極めて他のものと混淆して居り、大低の場合には其の系を解きほぐす事困難である。若し我々がシロコゴロフの基本型を眞の通古斯族を代表するものとして認めるならば、これと関聯さすべき決定的な型を発見する事は困難となる。彼等は頭の大きさに於て支那の南部原住種族とは明かに相違してゐる。彼等が黄色人の初期の系統に属し、混淆と移住とによつて変異せるものとする事は妥当のやうに考へられ、之等の環境の下に彼等はパレヲシベリア人に近いものと考へられる。彼等は其れと混淆したものと考へられる。

通古斯族は北滿よりソ領黑龍江沿岸にかけて居住するもの、總称であるが、種族的には滿洲族、黑斤族、鄂倫春族、索倫族、打虎爾族に大別することが出來る。

滿洲族は滿洲國の西部を除きその全領域に分布しその數四七〇万に及ぶと云ふ。黑斤人は本來ソ領のハバロフスクを中心として分布するもので滿洲國では黑龍江、松花江の合流点附近に居住し約一万五千の人口を擁する。鄂倫春人は興安嶺土着の山族で約三千人、索倫族及び打虎爾族は何れも興安東省、興安北省に居住し、それぞれ約六千、約十万の人口を有すと云ふ。滿洲族は厂史上周代の肅慎、漢代の挹婁、勿吉、隋、唐代の靺鞨、或は宋、明代の女真と称せられたものであり、又清朝を興し支那統一の大業を成したるものであるが、現今は所謂「滿洲旗人」と称せられ殆ど漢民族に同化せられて居る狀態にして、その風俗、習慣に於ても特に見るべきものも少く僅に北滿に古來の習俗を残すに過ぎない。

体躯は漢民族に比して小さく皮膚は黄白或は淡褐色を帶び、頭は短頭形

に属し頭髪及び眼睛は黒く、目は細く、鬚髯は少く顴骨は稍々秀で鼻は扁平で上向いて居る。これはツングース族一般に共通するものである。性格は決活にして、勇敢、敬長の念厚く、親子の情愛も亦濃かであるが、又反面単純にして、機敏とは称し難い点がある。

彼等の社会組織、生活様式は何れも漢民族との接触によりその独自性を失ひ、新疆省に存する小数のものを除いては全く漢民族化して居ると称しても過言ではあるまい。

満洲國の建國は一層それを促進せしめ規一的方向に向はしめんとして居る。

氏族はハラと呼ばれ、原則として、族外婚の単位を成し始祖屈熙、父系の血族並びに婚姻によつて吸收された女性を以て構成する。満洲族の社會組織の基底にはかゝる氏族制度的結合が在するのである。

婚姻に関しては男子二十才、女子十五才にて許される風習が存し、原則として族外婚が行はれるが、漢民族化せし地方にては支那に行はれる風習に倣つて居る。

生業の主なるものは、従来行商民なる牧畜も次第にその原始的形態の脱皮と余儀なくされると共に、多くは農耕に轉じ、現在では農耕に対して牧畜三の割合である。農耕も亦自然経済の域を脱して商品経済へと進み、それにつれて漢民族の商業高利貸資本の発達の地盤を與へることになり自らは零細農、小作農へと転落し、階級分化は一層促進せられたのである。農産物としては粟、小麦、高粱、玉蜀黍が主たるものであり、牛、馬等を飼育する。

生活様式に関して若干述べれば家屋は多く固定家屋にして集団的に居住し、その構造は一般に三間房子と称せられるものにして土壁で囲ム、草で葺いたものである。一室は一間四方にて、左右の二室を居室となし、アンペラを敷いて坐臥し中央は出口と炊事場として用ひられ床下に炕を設けてある。食事は主食物として、粟、高粱、玉蜀黍を摂り、副食物としては大豆其他野菜を用ひる。時には豚肉、魚肉、肉食することもある。嗜好品としては、高粱酒が愛用される。衣服は支那服に類したものである。

滿洲族を漢人と識別するのは男子にあつては弁髮であり、女子にあつては纏足をしない点及び既婚の婦人が頭上高く髮を束ねる点等であるが、何れも次第に行はれなくなつて居る。

滿洲族の言語は本来ウラル、アルタイ系に屬するものであつたが現在は殆ど死語と化し、漢民族の言語を使用して居る。又文字に於ても女真文字が存し、更に清代には滿洲字を創出したのであるが、現在は何れも殆ど用ひられることなく、漢字にその位置を譲つて居る。

滿洲族の奉ずる宗教はツングース族一般に信ぜられるシヤマン教である。以下のツングース諸族に於ても共通することなればその概要を記して置く。

シヤマン教（「滿洲教」）は一種の自然崇拜教であり、天神、地神を祀り、太陽を礼拝し、山川或は草木を崇めるものである。北方アジアの諸民族に於ては何れも固有の宗教として信奉し、蒙古族も喇嘛教が弘布される以前にはその信者であつた。シヤマン教は文化程度の低き種族に於て信奉される宗教とされて居るのであるが、就中狩獵或は漁業を生業とする種族の間

に最も敬く信奉せられて居るやうである。
シヤマン教の他宗教に比して特異な点は、寺廟を有せず、偶像の存しない点であり、経典もなく因果の理法も無く、全く素朴な内容のものである。信者は巫女（現在では男である）を通じてのみ神に接し得るとされて居る。満洲族のシヤマン教には次第に佛教的色彩を加へつゝあるものもある。

ゴルド族はその体質に於ては蒙古族と類似する点があつて身長は中以下にて皮膚は暗色、眼瞼細く、斜裂し、顴骨は突出、毛髪は黒い。性格は更に善良温和である。

漁撈、狩獵を主たる生業となす、未だ原始経済段階に止るものであつて、衣服は現在は多く満洲製のものを用ひるが、かつては衣服及び靴は魚の皮を用ひ「魚皮達子」と称せられた程にして、これによりてもその生活様式の甚だ低度なることを推察し得る。近来は漢民族との接触も増し農耕を営むもの次第に増加の傾向にあるが、農耕に転じたもの狩獵を副業として続けて居る。住居には簡易なものと固定したものとあり、前者は狩獵を主と

なすものに、後者は農耕を主となすもの、間に見る簡易なものは樹皮や草を以て小屋をつくり固定のものは満洲族に見られたと同様、一般に三間房子であつて壁は泥土、屋根は草葦である。多く南面して建てられ、その位置も河岸の高処に洪水を避けて建てられ、土壁を廻らして聚落を形作つて居る。

食物は農耕に転じつゝあるものは粟を主食とするが元来彼等の食料は魚肉が主であつた。

男女とも髪を刈り、女の未婚者は頭に髻を附け、結婚すると二つの辮髪に下げて居る。男子には辮髪のものもある。

シヤマン教を奉じ、特に虎、熊を保護神として尊崇して居る。

彼等は早婚にして、シベリアに住するものには妻を買ふ或は妻となるものの家で労働をなす習慣がある。漢民族と雑婚するものもある。然し婚姻も有名無実の状態にあり、乱交、婦女子の不貞等性生活は乱れ、これが因となり、更には幼少の頃からの吸煙、飲酒等が災してその人口は減少の一路

を辿つて居る。

農耕、狩獵、漁獵はその方式甚だ素朴な為に屢々衰される不作、不獵は益々この傾向を強化して居るのである。

その固有の言語はウラル、アルタイ等に属しシベリア、ツングースと満洲ツングースとの中間的なものである。

前述のゴルド族もオロチヨン族も漢民族の圧迫により次第に北方へ、或は山中へと移住せざるを得なかつたのである。

オロチヨン族は体格は前述の如くであるが、その性格は甚だ光暴性を有する。しかし反面家族員間の情愛には中々温いものがある。又一度信服すれば極めて従順であることも特徴の一つであらう。

オロチヨン族は原始的な狩獵生活を営み、乗馬に長じ、狩獵の術に長ずることはゴルド、オロチヨン、ソルン何れにも共通することである。

轉々とその居を移し、三、四戸にて群をなして森林中に散居する。

常に移動をなす彼等の住居は、極く簡単なものであつて、数本の丸太を四

錐形に組合せ、枯草、白樺の樹皮或は毛皮を以てその周囲を覆ふた天幕に住ふのである。

衣服としては多く毛皮を用ひて居る。食物は獸肉を主とするのであるが、時には獲物と交換することによつて得た麦粉、粟等を混食する。

オロチヨン族も亦年々その人口を減じつゝあるが、その原因はゴルド族の場合に挙げた事項と一致するが、全然狩獵生活に依存することゝ僅に雨露を凌ぐに過ぎない不衛生な天幕生活が一層それを強めて居ると考へられる。

オロチヨン族の社会には佐領の遺風が存して居る。佐領とは清朝時代の八旗制に基くものである。即ち世襲又は勢力者が部民の推薦によつて佐領の職にあつて酋長の役目を果すのであるが、この佐領が今日尚強大な権力を掌握して彼等を統率して居る。

結婚は同性同族を避けて行はれるのを原則とする。

彼等も亦シヤマン教を奉じ、狩獵に赴く方向、時機或は冠婚葬祭等一切をの巫女の言に従つて行はれる。

ソロン族は遼即ち鮮卑、契丹の後裔と称せられる種族である。性は勇猛、元来狩獵を唯一の生業とし、ツングースの他種族と共に弓矢に長ずるが、近年不振の弓これ亦農耕に移りつゝある。それに伴って住居も転住に便なる包より固定家屋に変りつゝある。

言語は満洲語に近いソロン語を用ひ、宗教はシヤマン教を奉じて居る。

ダホール族は性温順であるが又勇猛にして利発である。他種族が狩獵を一ふ間にあつて、農業を業とし生活程度に於ても勝つて居る。

言語はツングース語の一種たるダホール語を用ひ、文字も満洲字を用ひて居たが、現在は言語、文字ともに漢語を使用してゐる。

蒙古に居住するものには喇嘛教を信ずるものがあるが、冠婚葬祭は総てシヤマン教によりて行つて居る。

三、トルコ族

トルコ族は史上、匈奴、羯、柔然、突厥、回紇　結骨等の名を以て散見するもの、後裔である。これを種族別に大別すれば、トルコマン、ウヅベック、キルギス、ヤクート、オスマンリ、トルコ等を擧げ得る。

ウズベックとキルギスの一部以外のものはシベリヤの南部より東歐にかけて分布するものなればこゝにこれを省略することゝし、支那辺彊地帯にも居住するウズベック、キルギスについて述べることゝする。何れもカシユガールを中心として天山南路或は北路に居住するもの約二百万人に殺述の範圍を限ること、する。ウズベックは多く平野地帯にキルギスは山間地帯に居住す。上彊地帯に居住するトルコ族は就中平野に居住するはその回教を奉ずることよりして漢民族より種々の名稱を以って呼ばれたのである。即ち頭に白布を纏ふことよりして纏頭と呼ばれ或は惰　と稱して侮蔑の目を以て見られ更に一層漢化したものは東干人と稱せられて居る。

体格について見れば、身長は高く、皮膚は褐色或は黄白色、頭は長形、眼の虹彩は褐色或は灰色、鼻は高く、顴骨は突出してゐる。キルギスは

ウズベック等よりやゝ低い。東干人は体質に於て漢人の血を交へるが故に幾分異なるが、然し漢民族には似て居ない。

東干人即ち漢化の程度の甚だ高いものは勇敢であつてトルコ族中最も好戰的であつて、屢次蜂起された回教徒反乱の中心分子である。これに比して未だ東干人ほど漢化せざる纏頭は怠惰とも稱せられる程にして、忍耐強く、柔順である。キルギズ人も人口が集中して居るのは多く、山脈から流れ出る河川流域の農耕オアシスだけでステップや山岳地帶には稀に遊牧民をんす者、故に産業としで擧げ得るものもオアシスに於ける農業と牧畜のみである。彼等の中農業には多くウズベック族が、遊牧を業とするものは多くキルギズ族がある。

農産物としては、食料品として栽培される大小麦　類、蕎麦、高粱、玉蜀黍、粟、稷米等を擧げ得るし、畜産物としては牛、馬、駱駝、山羊、綿羊等が主たるものである。

遊牧者は主としても氈を以つて覆ふたテントに住み時には農耕者と同様に

蘆葦や木枝を以て骨組となし泥土で覆ふた家に住みて村落を形成してゐる。

服裝は襟のついたシヤツと大きな革製のヅボンを着けその上から木綿又は毛の長衣を着る。この上衣は気温の変化に伴ひ二枚或は三枚と重ねるのである。頭には円形にして縫取のある帽を頂き足には長靴を穿つ、頭に布を捲くが故に纏回と稱せられたが現在では教務を管掌する阿衡のみが布を捲いて居るにすぎない。女子の服裝も男子とほゞ同樣であるが、シヤツは足に達するものを用ひる。食物は植物性のものを主とし、茶の細紛の粥、大根汁、甜瓜、野菜類を食し、乳類、米ノ肉飯、羊肉、馬肉或は鳥魚類（豚肉は回教徒なる故に食せず）或はクミスや駱駝の乳で製したチヤー等を飲む。又綴茶、煙草を好んで用ふ。

東干人は風俗、習慣等も漢化して漢民族と大差ない。言語はトルコ語を用ひるもの、支那語を用ひるものがある。回教を信奉し戒律を嚴格に守つて居る。

現在支那の支配下にある。トルコ族は支那を通じてインドの安定をはかんとしその帝国主義の発展を希求する英国の勢力と種族的、地理的に近接するソ聯勢力の中にあつて自らの独立を欲しつゝ、支那本部と或は種族間の抗争を続けて居るのである。ソ聯は一九三一―三四年に亘る回教徒の反乱を期に巧みに自ら勢力を扶植して、その赤化政策は積極化しつゝある。

四、蒙古族

蒙古族はウラル・アルタイ系に属するもので西紀一二〇〇年代には英傑成吉思汗出で、その範囲欧亜に及ぶ元大帝国を建設し、北方アジア民族の名を昂揚せしものである。然し元朝の崩解するや、其の後統一的民族国家を形成することなく、むなしく数百年を蒙古高原の原始的遊牧民として送りしが防共、赤化の熾烈な闘争は又彼等をも二分し、新東亜建設第一線に浮び上らせたのである。

蒙古族と總稱せられるものは種族的には、ハルハ族、カルムーク族、ブリヤート族、の三種族に大別されるのが一般であり、内外蒙古を中心とし、中部アジア、シベリヤに亘って草原に分布する。広汎な地域に亘り、しかも遊牧を營みて住居を移すもの、多い蒙古族の人口の調査は、極めて困難であり、その推定も種々行はれて居るが三、四百万に達すると稱して居るものが多い。

ハルハ族は東部蒙古族、或は固有蒙古族と稱せられ、外蒙古東半部一帯から蒙疆、興安全省、更には熱河省、甘粛省西部、新疆省東部、青海省東北部に広く分布する。全蒙古族の中心種族である。

カルマーク族は西部蒙古族とも稱せられ、西方アルタイ地方より移住せしもので、新疆省北部、青海省北部に亘って居住し、ソ聯領内ドン河、ヴォルガ河畔にも少くない数を見る。總人口は約二十四、五万と云はれる。

ブリヤート族は主としてバイカル湖附近を中心とし、ホロンバイル附近にまで分布するが、ソ聯の支配にあるブリヤート蒙古自治共和国に殆ど

集中してゐる。北部蒙古族とも稱せられ、人口數三十三万と推定せられ、外蒙古に約一万六千、滿洲國に約一万とせられる。体質、容貌は蒙古型で、身長は中位、頭は広頭型に屬し、顔は廣顔にして扁平、鼻は高からず、額骨は高く、頤は稍々突出し、眼は蒙古型と云はれ細く斜めに切れて居る皮膚は黄褐色を呈する。

種族の性格は先天的であると共に、遥に多く後天的なものであり、種族の負ふ歴史過程、或は地理的環境に因つて左右される所大である。故に蒙古族の性格と稱しても全般に必ずしも兎当せず、その程度に於て高低あるは勿論である。概して彼等は大陸的な怠惰な氣風に墮して居り、かつて世界を制せんとしたあの慓悍剛毅、堅忍不拔の気質は薄らぎ、僅に素朴活潑にしてその強い記憶力、又鋭い觀察力を有するに止る。

殆ど無學文盲であり、單なる一弱小民族と化して居る。蒙古族の生業は牧畜であり、馬、牛、羊を飼育するが今尚自然經濟の域を脱しない程度の遊牧的方法をとつて居るものが多いが、清朝末に行はれた蒙地開放により

漢人の移住するものが増加すると共に遊牧を業となす蒙古族は次第に圧迫せられるに至り、一部には半農半牧の生活を営むもの或は又転じて集約的な牧場的方法を営むものが現はれつゝある。然し全般を通じて見る時は尚遊牧的方法によるものが多いが更に牧場的段階と半農半牧的段階と分化することにより原始的自給自足の経済を脱し次第に近代の傾向をとり蒙古族も商品経済へと生産様式を改めつゝあると云ひ得る。

しかしてこれは一面に於て内蒙では漢民族の高利貸資本と外蒙ではソ連の指導する協同組合への依存を高めつゝあるのである。遊牧と雖しても常に水草を追ふて移動するのではなく、自分の旗内に於て、春から秋迄は水に近い牧草の豊な地方に移り、冬には南面した丘陵の陰に移るのであつた、移動の道筋は家族群によつて大体一定して居り、原則として夏冬の二季以外の移動は行はれてゐないのである。農耕に転じつゝあるものゝ栽培するものは小麦、高粱等が主である。

概して遊牧民なればその聚落も一定せず、夏冬により、或は聚落、或は

散居の狀態を呈する。

内蒙古高原の社會には、貴族、平民、奴隷の三階級が見られる。貴族には二種ありて元明時代の蒙古の名族の後裔にして、清朝より爵位を授つて今日に至つたものと、喇嘛教の高僧とがある。

平民は各旗の民衆として、その旗内の生産階級を代表するものであり、奴隷の存在は封建的社會の存續を示すものである。蒙古の社會に於ては、喇嘛教の勢力の强大なのに伴ひ、喇嘛僧の權力は甚だ大である。

外蒙古にありては漢族の圧迫を避けんが爲ロシアの援助を得てゐたが活佛の死により一九二四年十一月には蒙古人民共和國の樹立を見ソヴエト体制が採用せられて居る。遊牧經濟の段階にある蒙古族にあつては、清朝支配下に於て、自己の旗地内に政治的にも經濟的にも束縛せられるに至つては、一家内の男子が總て独立して家を持つことは許されずこゝに於て次男以下を喇嘛僧になすと云ふ特種な人口調節が行はれると共に夫婦中心の小家族が營まれるに至つたのである。概して早婚にして十五、六才にて結婚をな

すものが多い。現在では恋愛結婚が多く單に父母の同意を得ればよいやうである。且つては当事者の自由意志が無視され、婚姻は全家族、全氏族のこととして決定されたのである。婚姻は一夫一婦制を原則とするが、貴族には一夫多婦のものもある。然し女の家族内に於ける地位は決して低くはなく、家にあつては生業に従事するのが女子であるが故に却つて活潑に活動して居るとさへ云ひ得るのである。

離婚は殆どないやうである。これは結婚後の恋愛もあまり問題とされず又生活上に於ても殆ど平等な彼等の社會では強ひて離婚する必要もないからであらうと思はれる。

遊牧民は移動に便宜な包を住居とする。包の構造について簡單に述べれば、柳を組んで骨組とし、厚い毛氈を以てこれを蔽つたものであつて、内経三、四米位で高さ二米位一、二時間で組立或は分解が出来る。半農半牧地帶のものは、固定式の包、或は漢民族の農家に模したものに住す。

衣服は男女ともに支那服より更に寛やかなものを用ひ、色彩は無地にし

て紅、黄、紺等のものを好み頭髪は喇嘛僧を除く男子は、辮髪にして居り、女子にあつては、未婚のものは髪を前額で左右に分け、後頭で編んで下げ、既婚のものは左右に分け、別々に之を巻いて下げ、更に飾をつける。男女ともに帽子を冠るが、布を巻いてゐる。靴は男女ともに獸皮で作られた長靴を穿つてゐる。

農耕地帯に住する蒙古人の生活様式は漢民族化され、蒙古人本来の姿を次第に変化させてゐる。食物としては、羊肉、乳製品を主とし、農耕地帯では、饅飩、素麺、或は野菜類をも食す。概して茶、酒、煙草を愛用する。何れも其の他の日用品甚に支那人より羊毛等の畜産物と引換へに購入するものにして、茶は茶であつて、塩を加へ、又牛乳を入れて飲む。酒は男女ともに飲み、中々強い。農耕地帯では支那の燒酒も用ひられるが、遊牧地帯では自家製の奶酒(アルヒ)を用ひる。ソ領内のものは生活様式がロシア化してゐる。言語は大きく分ければ三個の方言に分け得る。一は内外蒙古で用ひるもので一般に蒙古語と稱せられるものである。二はブリヤート語

にして、三はカルムーク族の用ひるカルムーク語である。何れもウラルアルタイ系に屬し、文字は元代以來ウイグル文字よりなる蒙古文字が用ひられて居る。宗教はシャーマン教が固有のものであるが、元代に西藏より喇嘛教が入り、その後清朝が蒙古族懷柔策としてこれを採用するに及び今の勢力は著しく伸長し、その支配力は内外蒙古にあっては殆ど絶對的のものとなって居る。又これは蒙古族の生活の經濟的要因も作用せしことも見逃すことを得ないが一族の末世を希ふ爲に長男以外は廟に入れて喇嘛僧となし、彼等も喇嘛教の聖地たる青海のグムブムや西藏の拉薩への巡礼を一生の念願にしてゐるほど彼等の信仰を獲ち得て居る。

現在喇嘛僧の数は夥しい数に上り内蒙古にありては住民の三分の一乃至四分の一が喇嘛僧であると云はれて居る。喇嘛教の蒙古族の文化的教養に與へたものよりも、それより派生せし害毒の大きさを知らねばならない。生産年令層の青年が無爲にして徒食することは、その貧弱な經濟力に對して過重であり、妻帯を禁ずる教理は、性生活の撹乱をもたらし、性病の蔓

延恐る可きものがある。喇嘛教の存在理由が社會淨化、或は人口調節にあるとは云へ現在を継続する時は、蒙古族はために衰微の傾向を辿らねばならないであらう。幸に内蒙古にありては皇軍の協力の下に着々と政治的、經濟的桎梏を打破し徒らなる弊風は一掃せられつゝあり、かくてその將來は新興民族として期する所大なるものあるは彼我共に慶ぶ可きことである。

他にキリスト教、回教もその勢力を移植し、次第にその成果を挙げつゝある。即ち前者は医療、教育或は救済等の社會事業により、後者は信徒間の強固な団結心により次第に蒙古族内に信徒を獲得しつゝあることは信徒數の少きに拘らず喇嘛教の現状と対比し、多くの問題を示唆して居る。

外的勢力の侵潤について述ぶれば、内蒙古にあつてはハルハ族が前述の如く我が國の意図する新秩序建設の一翼として立てば、外蒙古にあつてはブリヤート族が封建的社會より一擧にして共和国へ轉じ蒙古人民共和国を樹立、ソ联の赤化政策の下にありて蒙古赤化の先鋒と化して居る。

五、西藏族

西藏族は古代の氐羌、唐代の吐蕃、宋代の西夏　の名によつて知られたものであつて、その後裔約三百万人と推定されて居る。然し西藏族の名称にて總括せられる種族は極めて多くボドパ、カムパ、チャムパ、ドルンパ、ソクパ、チャクパ、ローパ、ミシミ、ミリ、アボール、ダフラ、シイハン、タングート等が挙げられる。

その分布地域は次の如くである。

ボドパ族	拉薩を中心とする南部。
カムパ族	西康省の西半部の　大河の南北の渓谷
チャムパ族	パンゴン湖、テングリ湖、昌都以北の高原
ドルンパ族	東経八〇度より九二度、北緯三〇度より三六度の高原を遊牧
ソクパ族	西藏の東北部
チャクパ族	西藏の中部

ローパ族　ヒマラヤの南腹からシッキンの東部

ミシミ族　アッサムの東北部から西康省の南部及びアホムの北方

ミリ族　アッサムの東北部ラグパール地方のブラマプトラ川の北岸、北はディホング川迄

アボール族　アッサムの東北部と西藏の境界地方、ディホン川の渓谷

ダフラ族　アッサムのブラマプトリの西流地帶の北側の山地

タングート族　青海省

シハン族　西康省

西藏、アッサム、西康省の西部、青海省の広大な地域に亘って分布するものであるから一概に述ぶることは困難であるが南方居住の諸族にありては印度諸族、印度支那諸族、支那西南部諸族等との混血多くして、西藏族型を示すものが少いが、北方では多少、蒙古族、トルコ族が雑るが西藏型

が保持されてゐる。身長は高く、皮膚は褐色を呈し、頭型は広頭に近い中頭で、頭髪は黒く直毛又は波状毛である。目は概して水平にして虹彩は褐色、蒙古皺襞はない者が多い。鼻は蒙古人よりも高い。性格は忍耐強く、柔順であるが、保守的にして甚だ鈍重である。

体型に於ても種々存する如く風俗、習慣も異なるものが多いが一般に兄当するものを挙ミとゝする。

杜會階級は貴族、僧侶、平民の三階級に分れ、一種の門閥であつて、印度に見る種性制度に類似して居る。貴族、大寺院は土地を領有し、その領地内の住民は恰も一種の農奴の如き有様である。特に僧侶階級は絶對の權威を有し、僧侶階級の中に於ても最高權力は達賴喇嘛が保有する。家は嚴重な長子相續であつて、長子は家長として一家の權利を継承し、他のものはこれに絶對服從をなす。環境が貧しく、生活物資の欠乏は、分家或は家族員の増加の抑制することによつて一家の衰亡を防ぎその存續を願はざるを得なかつた。かゝる思想は結婚に於いても一妻多夫と云ふ特種の風俗の発生を見、現にこれが行はれて居るのであ

る。名義上兄のみが妻を迎へ、弟は自分だけの妻を娶る事が出来ぬ爲、自然兄弟数人にて一妻を持つ事になるのである。しかし一人にて不足の場合には二人、三人と娶ることあれば多夫多妻と云ふ場合も存するのであり、祖先の家より分家するものには多妻を娶るものもある。更に貧者の間にありては一夫一婦もある故、結局西藏の夫婦制度には一妻多夫を一般とし、多妻多夫、一夫多妻、一夫一婦の四形式が並存して居るのである。

西藏にありてはその全住民の五分の二は牧畜を主となし、四時水草を逐つて居を移し馬、駱駝、牛、羊、山羊の他に犛牛麝鹿も飼育して居り、貧者と云へども数十頭を所有し富者は二、三千頭に及ぶと云ふ。

南部西藏の山麓平野或は大河流域地帶に於ては農耕が行はれて、稞、大麦、小麦、玉蜀黍、豆類、馬鈴薯その他の蔬菜等が作られる。然し農耕を営むものと云へども前記の動物を飼育して居るのである。故に西藏族の主たる生業と云へば牧畜と稱するも過言ではない。

住居には二種あり、一は農耕に從事するものの家屋であり、他は遊牧を

なすものの天幕である。前者は農耕地帶に見るものであつて、家の外壁は石を積み、屋根は平たく、窓は小さく、室内は甚だ暗い。家屋に住するものは一般に散居するが、稀には聚落を作ることもある。テントは牛毛にて織つたものを用ひ、四本の支柱を以て骨組となす、移動に便利なものである。服裝は筒袖にして寬濶な膝に達する上衣を着け、帶を締める。下には繻伴及び支那式の股引を着ける。上衣は寒暑の差の激しいこの地方にあつては、夏は繻子の如き布を、冬は裏に毛皮を着けたものを用ひる。色は紅黃を尚ぶ。女子の服裝も男子と同樣であるが、必ず前垂れを用ひて居る。頭髮は男子は辮髮にして、象牙の簪を挿す、又女子にありては未婚のものは辮髮をなし、既婚のものはこれを行はない。近來彼等の間にありて蒙し、支那の服裝をなすもの次第に增加しつゝある。

食物は肉、チーズ、茶が常食物である。肉は主に犛牛、羊及び野獸の肉であつて、乾物にしても食す。豚及び鷄は主として東部で食し、南部にても幾分用ふ。茶は磚茶を沸かし犛牛の乳から作つたバターと塩を加へたも

のである。西藏族の生活が動物の飼育による結果その食物も亦殆ど動物性のものである。副食物としては東部、南部の山麓、或は谷地に産した野菜が攝られる。その主なものは蚕豆、大豆等の豆類、馬鈴薯、玉葱等の蔬菜類等である。大麦を炒って砕いたツアンバと称するものも又好んで食する。彼等は大食であって、時を選ばず食事をなすものも多い。食事は木製の椀でなされ、手づかみで食べる。嗜好品として煙草、酒を好む。酒は多く自家製の麦酒、燒酎を用ふる。

西藏族の宗教は、以前はシヤマン教式のボムボ教を信奉してゐた。ボムボ教は現在ではウイ、ツアンの中央部、東部に残存し、ボムボの名で種々の儀式を行つて居る。僧侶が黒衣をつけるが故に黒教とも稱せられ、天の日神、地の黒女神、赤虎、龍を祀る。信徒の数は約五十万を下らないと稱せられて居る。現在は主として喇嘛教を信奉してゐる。喇嘛教は、印度より入りし佛教が、土人の迷信と結合し、西藏の自然的社會的環境の中に於て生じたものにして大乘佛教の一派であつて、密教に屬する。喇嘛教は紅

教、黄教の二派あり、僧侶の帽色によって區別されるが、前者は広く行はれ、後者は一四〇〇年頃改革されたものである。西藏に於ける喇嘛教の勢力は、甚だ強大にして、寺廟三千、僧尼五十万を下らずと稱せられる程であり、貧民に於ては喇嘛教の僧尼たることを以って唯一の立身とするほどである。回教徒も亦全地域に亘って散在するが喇嘛教徒に比し、極く少数にして到底喇嘛教の勢力には及ばない。

西藏族の言語は本来サンスクリッドより派生せるティベッド、パーマ語系に屬する西藏語であって、一部は單綴語、一部は膠著語で、支那語と蒙古語の中間に位するものである。文字は横書で、サンスクリッドからとったものであって、母音は符号で示し、子音は三十四のアルファベットから成立って居る。現在は中国の自治州にして、事實上喇嘛僧の手にある。

西藏を廻って、支、英の勢力が抗爭を續けるのは既に久しい事である。英国は西藏族に於ける喇嘛教の絶對的な權威を利用し、僧侶階級の最高權力者達賴喇嘛を後援することにより、西藏をその勢力下に入れんとして居

るのである。

六、漢族

一般に中國人と称せられて居るものはこの民族に屬するものであつて、中國四億の人口の九割以上を占めその全領域に亘つて分布す。　亞洲國々民の大半が漢族であることは周知の事實であり更には華僑として七九〇万の人口が外國に生活を営むと言ふ状況にて世界の一大民族たるを失はぬ。華僑の大部分は南洋一帯に居住するもので、居住数多きものより地域別に挙げれば、タイの二五〇万、英領マレーの一七〇万、蘭領東印度に一二三万が主たるものである。

漢族の起原をこゝに明にすることは出来難いが、五千年前支那の西北方より黄河沿岸に移住し来りて発展したものであり、先住民族たる苗族を南方に追ひ「夏」と称し次第に大をなしたのである。　史上に見る茅夷、淫戎、百越、氐羌、群狄、群狛等は何れも漢族に圧迫又は同化せられたものである。

長き歴史を有し、地勢風土の豊なる廣大な地域に亘つて分布する漢族に於

る、習慣、言語等を異にするは勿論であると共に、その体質に於ても決して同一的なものではない。身長に於ては北部に高く、南部に低い。胴長にしても北支より南支へと縮る云つた有様である。概して身長は中、皮膚は淡褐色から暗色、顔は長顔乃至丸顔にして鼻は高からず。頭髪は剛直で黒く、体毛は少い、虹彩は多く黒褐色にて、蒙古襞は大多数のものが有し、目は水平のものが多い。気候風土に耐へる強さに於ては頑健と称するに値し、北は酷寒のシベリヤより南は暑夏の赤道直下に至る迄その活動圏を拡張してゐることは以てその証拠たるに充分と云ふを得べきであらう。勿論之は肉体的の強度の証拠たるに止らず、忍耐強く、勤勉にして労働を厭はない漢族の性格にも由来すると考へ得る。然し性格的にも、肉体的にも優れた点を有しつゝも、広漠たる大地域に拡り、重なるに歴代の悪政及国家の恩恵を知らしめざりしため、遂には国家的観念を欠除せしめると共に没法子的性格を植え付け利己心の満足を以てその唯一の生活目標となしめるに至つたのである。

支那社會即ち漢族の形成せし社會を見るに、依然たる封建的、農奴的な性格を一掃し得ず、辛亥革命、國民革命を經て今日に於ても民主々義共和國の本質的実現を見ず、國内に於ける反動は刎強に乗ずる機會を與へ、彼等の鄉土を化して半植民地となすが如き状態を呈して居る。

かゝる状勢下にありても漢族自体は既に保身の術を會得してゐたのである。しかしこれは民族自体の保身の術にあらずして一家一身を保持せんとするものであることは注目に値する。即ち支那社會の基礎をなすものは勿論纖毅的色彩を帶した、民族である々、それの形作るものは國家にあらずして地方にありては地緣団体であり、都市にありては職業団体である。家族に関しては非婚姻と関聯せしめて後述する。地緣団体は又血緣団体とも密接な関係を有することにより彼等の同鄉觀念を一層強固にせしめ以て部落の自衛に当るのであつて、彼等にとつては國家の存在々租税徴收以外何等の関係なきものたる以上これぞ唯一の社會となすは又當然の事と考へられる。又政治の不良は社會の混乱を惹起するは必然である。

これに對して商工業者は自らの利益擁護に當らなければならぬ。かしる目的を以て形成されるものが彼等の職業團体である。

要するに全体の中に個の存在するを意識することのなかつた彼等は、個を中心とせし觀念の発達を余儀なからしめたのである。現実に形成せられた地縁團体、職業團体の存在は彼等の生活を政治、社會の混乱より遠ざけて居つたのである。この他に支那社會の特異性を示すものに土匪、秘密結社等がある。

漢族の産業事情を概觀するに農業人口三億を超える世界最大の農業民族と称することも出来得る。然しかゝる農業人口を有しつゝ猶且彼等の農業は食糧を輸入しなければならぬと言ふみぢめな段階に停滞して居るのである。四%の大地主が全耕地の五〇%を、六%の富農が一八%を所有するのに對して九〇%の中農、貧農が三二%の土地を有するに過ぎないのである。更に自作、小作別に見れば農家戸数の三二%が小作人、二三%が自小作である。

封建的社會の殘存する中國に於ては貧農は勿論、中農の相当部分も農奴的関係に置かれざるを得なかつた。このことは農業技術の発展を全く忘却せしめて居つたのである。屢々聞く洪水の被害、旱魃の惨状等は正にその苛酷な表現である。

重要な農産物とその主たる生産地域を挙げれば次の如くである。

米、、、、、揚子江流域以南

小麦、、、、、北支中支

高粱、黍、、、北支、蒙洲

玉蜀黍、大麦、、、、北支

大豆、、、、、蒙洲、北支

その他、生絲、茶、落花生等がある。

牧畜は独立的存在とはなつて居らず、役畜として、馬、騾馬、驢馬、水牛等があり、農家にあつては豚、鶏が飼養されて居る。

工業は手工業生産の家内工業或はマニュファクチュアの形態の下に廣く行はれて

居り、紡績、金屬生産等に見られるが、これらは何れも農民の土地收奪と農家生活の貧窮より結果される低廉な勞働力の上に成立してゐるのである。彼等の商業資本は産業資本へ轉化することなく、徒らに封建的体制に依存して行くのであつて民族資本の確立を見ず外國資本の大工業支配は即ち低段階にある支那社會と高度に発達した経済力を持つ資本主義先進國との結合であつて中國の半殖民地的性格を物語るものである。

しかも外國資本は農産加工或は繊維工業、鑛業に投ぜられ重工業部門の発達は抑制されて居るのである。

日支事変前に於ける支那に対する列國資本の投資順位は英、日、露、米、佛、独の順である。

衣服は寛衣を纏ひ、夏は夏布(レアープ)を、冬は馬褂兒(アマクル)(上衣)袍子に褲子(クツズ)を着ける。

住居は北方では概して土廂造で土、石等を多く用ひ土藏式のものであるが南方では木造、煉瓦造りのものが多い。北方或は南方でその構造を異にす

るので一様には述べ難いが全般を通じて見れば殿堂造りのものがその特色をなして居る。

構造は外敵の侵入を防ぐ可く壁は一尺余の厚さを有し、窓或は入口は出来る丈け小さく、その為採光には殆ど注意されてゐないと言ひ得る。更に入口の正面には影壁（インピ）と称して衝立式の壁が設けられ内部の見通される事を防いで居る。中庭の正面が應接室で、その隣室は主人の室或は夫婦の室で左右に書斎、客室、子供室、第二夫人以下の室があり、使用人は門に近い室に居る。

食事に就ても一様に説く事は出来ぬ。地方により二食のところと三食のところがあり飯と菜に分けて述べれば、飯は米、粟或はその粉であり、地方によりては饅頭の類、玉蜀黍を常食とする。菜としては豚鶏羊、蔬菜、魚肉類を、濃厚な胡麻油或は南京豆の油を用いて料理したものである。食事の主要な部分を占めるのはこの菜であるが、中流以下の家庭では飯が主たる事は何処も同じである。

言語は標準語である官話の他に各地方の方言が多数に存在し、それらは全

く相通じない。

官話と称するのは前清時代からの事であるが、必ずしも官用語を意味するのではなく、寧ろ普通語と現在称して居る如く他の方言に対して普く通じると言ふ意味である。　官話は大別すれば次の三種に分ち得る。

即ち北方（或は北京）官話、南方（或は南京）官話、西方（或は西蜀）官話、これである。後の二者は揚子江方言とも称せられる。

他の方言を細別すると数十種に上ると言はれる。

漢族の大部分は孔孟の教たる儒教が、黄帝老子を祖とする道教、或は印度より傳来せる佛教を信奉する。然しその一つを信仰するとは限らず、佛教徒であると同時に儒教徒であり、又道教徒であると云ふ場合が多い。

喇嘛教、回教、キリスト教を奉ずるものもある。

結婚は男子十六、七才、女子十四、五才のものが多いが、異性間の男女或は男系親族及び遠族等即ち同累のもの以外の男女に限つて許されるものである。

婚約の形式は種々あるが、媒の中にある子供同志を双方の父母が婚約する

指腹婚すらある。離婚は夫婦相互に協議が成立した場合以外は、夫の側では「七出」の一言の條件を具備すればこれを行い得るが、妻の側では義絶若しくは夫の失踪の場合以外はこれを請求し得ないのである。

猶又一旦或る男子と結婚せし婦人は夫に死別或は離婚した後に於て、夫の兄弟、夫の一族と結婚することは禁ぜられて居る。

前述の「七出」とは、無子、不事舅姑、淫佚、悪疾、口舌、妬忌、竊盗の七つこれである。然し「七出」の條件を具備すれども妻に於て「三不去」の條件があれば夫は妻を離婚することが出来ない。即ち「三不去」とは

一、要る時には妻の実家は栄えてゐたが今では妻は再婚されても歸るべき家のない時

二、舅姑のために三年の喪に服したこと

三、夫家が妻を娶る時は貧賤であつたが、その後夫が富貴になつたこと

の三つである。

七出三不去以外になほ前述の義絶があるが、これは夫婦両者から共に離婚請求の原因となし得るものである。しかし義絶については一定の解釈がないが要するに妻が夫や舅姑を殴打殺傷したり、夫が妻を殴打或は他人との通姦を強ひ、他人に妾として賣り又は質入れするが如き場合を指すものである。

漢民族の現状を見るに、列國の半植民地的性格を有する中國は半植民地性半封建制を解決して長き歴史的停滞より脱却し民族の生存、独立、自由を獲得せんとして蹶起したのであるが、その保有する性格の故に歪曲せられた抗日戰線を結果するに至つたが今や將政權の没落を契機としてこの支那民族運動も正しき軌道を辿らんとして居る。正しき理解と眞の協力こそ彼等の欲するものであるは贅言を要しない。

漢族中南部に住するものに客家、福老等がある。何れも本質的に漢族と異なるものではないが地方色の比較的濃厚なものと云ひ得る。

客家はかつては北支那に住せしが、五胡の乱以来南下せるものにして、先住民たる猺人の婦女と混せしものもあり多少混血に属する。現在は廣東省の大部分殊に梅縣を中心とした地方、海南島、広西省の一部の外、福建省漳州、汀州方面にも散布し、我が台湾に住するものもある。主に農業を営み、漢族からは賤民扱ひされてゐる。　婦女も亦農業に従事して、纏足をせず、又他族のものとは結婚しない。方言の一たる客家語を使用し、広東省のみで約四〇〇万に及ぶと称せられて居る。

福老は廣東省の東部潮洲、汕頭一帯に住し、明代に移住し来りしものである。　汕頭語を語し野性的で農業を営み都市では人力車夫等をなして居る。

其数約三〇〇万と称せられる

七、苗族

苗族には紅苗、青苗、白苗、黒苗、花苗等があるが何れも漢族に近く、衣服の色彩によって分つたものであつてその類別は重要なものではない。次に主なる分布状態を記せば紅苗は湖南から貴州省の東部にかけて分布し其中心地は銅仁附近である。白苗及青苗は貴州省の中部地方に、黒苗は一名生苗とも称し、黎平、都匀を中心として、貴州省の東南部に及ぶ。花苗は貴陽附近を中心とし、西、安順を経て雲南東部に至り、北は武定に達し更に金州江畔に至り、南は珠江上流臨安附近より更に南下して佛領東京の北部に達する。以上を綜合すると苗族の分布地域は貴州省を中心とし、一方は廣東省に及び他方は雲南省の東部並に佛領東京の北部に亙る人である。何れも山中の僻地に住するものであつて文化の低い原始的の生活を営んでゐる。概して身長は短小にして皮膚は赤味を帯びた黄色で、頭髪は黒く直毛、頭は広頭にして顔は円形或は稍四角に近い。眼は概して二重瞼で細長く、亦蒙古人の眼と類似し、色は暗黒色にして、位置は水平なものもあ

れは傾斜せるものもある。要するに苗族の体質は蒙古人就中アジア南部の蒙古人種に最も類似して居る。　性格は慓悍にして漢族、甚だ忍耐強い。快活とは称し難い。山間に住するものは農耕を主とし原始的な焼畑農法を行ひ、米作のほか、玉蜀黍、野菜、大麻等を造り土地によつては牛、馬、羊、豚等の家畜の飼育をなすものもある。独特な織機を有して麻布を製する。

往昔は各苗族共独立した社会制度を有してゐたが次第に漢化しつゝある。苗族の婚姻は自由結婚にして一夫一婦主義である。各苗族等の通婚は禁せられ、黒苗なれば黒苗同志の間で行はれ、他苗族との婚姻は許されないのである。

信仰は祖先崇拝であるが、固有の宗教を失ひ多くは佛教を信じ、且つ多少は道教を奉じて居るものもある。

言語は単綴語であるが決して純粋な言語ではなく、印度支那諸族の言語が含まれて居るばかりでなく、支那語、西蔵語と、その語源を一にするものがある。

多くは別居をなし数家より百数家の群をつくる。

貴州省のものは地質又石灰岩よりなり樹木の少いため家屋は柱と棟とを除いては殆ど石材を用いて居る。雲南省の東部には木材を使用してゐるものが多く、屋根は草葦で椰子葉等を用ふ。

苗族はみつて「椎髻民」とも称せられた如く男子は頭の上に髪を巻く結び常に頭布を用ひて居るがこれには猟帽の如きものと、白布、黒布の三種がある。女子も同様に頭の上に髪を巻く結ぶが其の他種々結び方を変へて居る。男女ともに頭に銀製の鎖を付け、耳朶には銀又は鉛の耳飾をつける。

男子の衣服は麻布又は綿布で作った軍幅の右襟の長衣で、袖、裾ともに長く白、灰、紺等の色のものを用ひる。帯は綿製の扁平のもので後で結んで長く垂れる。更に袴を着けて足首を結ぶ。

女子の衣服は色彩も種々あり美しい刺繍がなしてある。長衣は筒袖で、下に赤一枚の黒い、襞のある短い裙を纏つてゐる。

食物は多く植物性のもので、米、粟、玉蜀黍等を常食とし、箸を用ひて食す。

儀式を挙行する時は豚肉を喰ふ。

英國は戰略的にも、經濟的にも雲南、貴州を勢力下に置く事を欲し屢々支那政府との間に交渉をなしたが日支事変の戰端が開かれると及び滇緬公路の建設工事は進められ、苗族等多數が動員せられ、かつては明朝に叛き、山岳地帶に退いた彼等の民族問題も再然しつゝある。

八、猺族

猺族は廣西省に最も多く、殆んど全省に亘つて分布し、就中懷集連賀の八排猺山、修仁、武宣間の猺山に最も多い。しかし猺族もその種族甚だ多くその分布は更に廣く、廣東、湖南、貴州、雲南各省の辺境地方、タイの最北部の千米以上の山地、佛領印度支那の東京の北部國境附近のパク地方紅河地方にも居住する。人口は約十二万と称せられる。畜民も亦猺族の一つであつて福建省の西部、浙江省の西南部に住んで居る。猺族は次の点よりして苗族と同系統の種族であると考へられる。即ちその言語、体質が類似し、又その名称の由来よりして知り得るのである。

生活様式その他何れも苗族に類するものなれば説明を省略すること、する。

九、羅々族

羅々族は四川省と雲南省の界、金砂江の西岸にある大涼山を中心となし、四川省南部、雲南省東部、貴州省西部、佛領印度支那東京の西北部バオ・ラ地方に分布する。

頭髪は黒く剛毛であるが波状のものが多い。身長高く、皮膚は淡褐色で豆し、頭の形は長く、鼻は多少扁平、蒙古皺襞は無いものが多いが、目は水平のものと斜のものとがほゞ同数である。四肢は細長く強健である。性格は慄悍であるが独創性に乏しい。

羅々族の間にありては尊長、平民、奴隷の三階級があり部落を形成し、各部落は尊長が統率する。尊長は世襲的なものである。尊長は「黒人」と称する漢族の捕虜を所有し、奴隷として使用する。平民に相當するものは米作をもととする農耕を行って居る。

衣服としては短い上衣に、長いズボンを着し、腰に帯を締め、頭の上に髪を結び、頭は多く黒布で包む点等苗族に似る点が多い。外出する時は必ら

すホク或は大刀或は槍を携行すると云ふ。女の上衣は長く膝に達し、裾は地に引き、ズボンを用ひない。髪は辮髪にして頭に圏いて居る。言語はビルマ、チベット語を話す。宗教は佛教、道教を信奉せず未だに拜物教を信仰す。